

# 北米インディアンの生活 (5)

## - 23 部族の伝承と習慣 -

エルシー・クルーズ・パーソンズ 編 著  
神 徳 昭 甫 訳

### VI メキシコの部族

#### VI - 1 テペカーノ<sup>1</sup>族<sup>ザ・チーフ・シンガー</sup>の祭司長<sup>2)</sup>

ドン・パンチョ<sup>3)</sup>の奥行き 15 フィート、間口 8 フィートくらいの、ちっぽけで卵形に歪んだ茅葺き屋根の家の周囲は、いつになく活気に包まれていた。構造上この家は、切妻造りで茅葺き屋根を載せた骨組みを二本の柱で支えている。まともに向き合えるのは正面の中央部あたりに過ぎず、そこを強く一押しすれば、モルタルも土も使っていない、ただ軒下と地面の間に石を積み上げただけの外壁は、ガラガラと崩れ落ちてしまいかねないほどの代物だった。

ドン・パンチョの家の中はめずらしく騒々しかったが、それはテペカーノ族の生き残りを保護する、アスケルトン<sup>4)</sup>という名のこの小さな村の平凡な歴史においても、なんら時代を画するほどの大事件の発生を示すものではなかった。それは単にドン・パンチョの子供が生まれるのを待っているのに過ぎなかった。それで近所の女たちが小屋の中に集まっているのに対し、男どもは外にいて低い声で話を交わしていたのである。フランシスコのみが自由に出入りしていた。この男が最後に中に入ってからかなり長い時間が経過したあと、やっとのことでしらずと姿を表した。

「やったぞ、男の子だった！」彼は静かに言ってこの日のために、一番近い町場に最近出かけて買って来たソトール燻<sup>燻(注1)</sup>を一本、どこからか引っ張り出してきた。男どもは彼のまわりに集まり新生児の健康を願って祝杯を上げたのである。彼らはそれぞれ父親に祝いの言葉を浴びせ、それからそっと暗闇に抜け出て自分のあばら家へと引き揚げて行った。後には赤ん坊のギャー、ギャーと泣く声が山の静寂を壊したに過ぎなかった。

この村に再びいつにない活気が戻って来た。近くの町から主任司祭<sup>ク</sup>がミサをあげるためにその日やってくるという知らせが飛び込んで来たからだった。ここの教会堂に隣接する教区全体

の家々の窓は空け放たれ、風が通されたし、床の泥が掃き出され粗末なキリストの磔刑像からは埃が払われた。というもこの小さな教会はアスケルトンの誇りだったからだ。アドビー煉瓦と町の石工によって切り出された石を使って建てられたのはもう一世代も前のことだったが、その白亜の正面は、地獄のあの硫黄の火に対するがごとく勇敢に、焼け付くような熱帯の陽射しに真っ向から向かい合っていた。小さな中庭もまた掃き浄められたばかりで清々しく輝いていたし、そのすべすべした地面を損なうものは、一本の雑草はおろか、緑色の点すら見当たらなかった。

ドン・パンチョのよく利く目はとうとう曲がりくねった道をゆっくりと降りてくる馬上の一行を捉えた。大急ぎでフランシスコはがたがたの梯子を上がって教会の屋根に登り、鐘の舌を掴んだ。この教会の執事としての役目の重要性をこの男は実によく知っていたのである！ いや、実際彼は司祭様が正式な挨拶もなくやって来たときはいつだって全く生きた心地もしなかったのだから！ 幾つかある鐘のうち、一個だってまだ罅の入ったのがなかったのは、フランシスコが特別な手入れをしていたからである。この鐘楼に注ぐドン・パンチョの愛着は、教会そのものに対する気持ちにも決して劣らないほどだったが、それというも「鐘は巨額の資金をはたいてあの遠い首都メキシコ・シティから買い入れたのではなかったか？」鐘を鳴らし終わると、フランシスコは梯子を軋ませながら急いで降りてきて、陽気な司祭の前に真っ先に膝まずき、真っ先にその手に接吻をした。鐘の轟きに目を覚ました小さな谷間の住民はぞろぞろと中に入り始めた。教会の中に入ったあと、これらの善男善女はミサの行われる間、両側に向き合い、煉瓦の床の上に恭しく膝まづいていた。

祈禱が終わり、アグイラー家の人、つまりフランシスコと妻のフーリアは子供を抱いて立ち上がった。彼らのそばには代父、代母のホアンとその妻が並んだ。洗礼の水が二、三滴振りかけられ、典礼に則った言葉が与えられ、母なる教会はまた新たな魂をその胸に受け入れたのであった。ホセ・マリアという名前を司祭は会員名簿に書き込んだのである。

しかしここ何週間この幼いホセ、もしくは彼が愛情をこめて呼んでいるペベ、の身の上はこれまでまったく平穩無事だったのだろうか？ 決してそうではない。フランシスコという男は、息子の幸福を危険に晒すにはあまりにも誠実な男だった。神父たちが彼らに神やキリストのこバードレとを教えるより前の何百年もの間、彼らの先祖は父なる太陽、母なる月、そして兄金星を拝んできた。実際、神が太陽であり、聖母マリアが母なる月、そしてイエスが金星であることはまったく明らかなことだったのだ。というもこの教会に掛かっているグアダルーベの聖母の美しい絵画は彼女が月に立っている姿を描いているではないか。この二つの宗教は、敵対しているわけではなくて、ただ補い合っているのだ、苟もこの問題に限ってはフランシスコはそう考えるのだった。とは言っても神父さんとこのことを論じても無駄だった、とても理解できないであろうから。従ってペベが生まれるとすぐにフランシスコは、小さく四角に切った色つきの

編み糸を幾つかぶら下げた祈祷棒を四本作り、東西南北の方向にある四つの丘に行くと、秘密の祭壇をこさえて供え、それぞれの場所で子供の健康と幸運を祈って小声で祈りを上げたのであった。

幼いホセは大きくなって少年期を迎えていたが、しかし彼のこの社会での地位はいささか異常なものだった。つまり南方のなだらかな起伏の土地に住む、混血のメキシコ人のペオン<sup>5)</sup>よりも少し下で、山中の異教徒ウィチョール<sup>6)</sup>よりも少し上だったのだが、双方から蔑まれていたのである。しかしそんなことはほとんど気にならなかった。というのも彼は愛する両親や友人たち、それに豊かな自然に取り巻かれているのではなかったか？南北にポリャーニョスのパツランカ<sup>7)</sup>峡谷、すなわち悠久の時の流れとともに、いつしかその底が小さな銀色の川によって穿たれた巨大な大地の裂け目が走る。乾期には小川ほどもないその流れは、雨期に越すこともかなわぬ奔流となるまでに増水する。その両側にはパツランカの険しい斜面がそそりたつ。東側は「隣人」であるメキシコ人の住む、緩やかにうねる土地へと続き、一方西側では、山々が次第に高くなり、それがついには異教徒のウィチョールとかコラ・インディアン<sup>7)</sup>のいる大シエラ・マドレ山脈へと連なっていくのである。ときたまウィチョールの小集団が山の家への行き帰りに、この村を通り抜けるのを、ホセは母親のスカートの後ろに隠れて覗きながら、彼らの腰の周りに巻かれた小さな手織の鞆とか、奇妙な形の帽子、弓矢などに目を瞠ったのだった。

「わしも今のおまえくらいの時分には」祖父のネストール老人が話して聞かせた。「今の子供と同じでみんな同じ格好をしていた。だけど、それから結婚すればカミさんが毛布を織ってくれたし、自分でも鹿革の服を作った。じゃのにあゝ、今はみんなが白いシャツ、ズボンを着て、もうすっかりメキシコ人になってしまったようじゃ！」

ホセはネストール爺さんが語る過去の栄光の物語に耳を傾けて決して飽きることはなかった。かつてテベカーノ族は強力な部族であり、大きな領土を所有していたという。しかし戦争や疫病などによって最悪の状態を招き、部族は次第にホセが生まれたこの峡谷へと後退を余儀なくされたのであった。さらにその当の峡谷においても、メキシコ人は徐々に侵入していた。部族の女と結婚するものもいたが、遠慮会釈もなく彼らの先祖代々の土地を奪い取って初代の財産所有権者に収まるものも数多くいたのである。

ホセの記憶の中で一番古いものと言えば、もちろん家や家族に関することで、彼にとって家とは素晴らしい場所、両親とは間違いなく全知全能の最も素晴らしい人たちであった！確かに彼らが知らないこと、出来ないことはこの世には何一つなかった！特に母親は実に忙しくよく働く人だった。最初の陽光によって明けの明星がかすんでくるころに起き出して、一晩中、豆を煮込む鍋やコマル<sup>8)</sup>の下でくすぶっていた火に薪をくべ、他の家族が完全に目を覚ます頃には、小さく円く平らなトルティーヤが焼き上がっている。こうした小さくて薄い、酵母ぬきのトウモロコシの練り粉を焼いた菓子はテベカーノ族のみでなく、労働者階級の何百万という

メキシコ人の主食なのであった。半分に折ってスプーン代わりに褐色のマメのチリ・ソース<sup>9)</sup>和えを掬って口にもっていくときのあの嬉しさ、おゝ！ これ以上旨いものを誰が望むだろうか？ 間違いなくホセにとってはそうである。しかしこれは母親にとって何という、重労働であろう！ 母がそう思っているというのではない、彼女は他のところを知らないのであるし、またこれは、この部族の婦人すべてが受けもつ運命でもあるのだから。

従ってアグイラー夫人は、一日中 いやそのほとんど を石のメタテの上に屈み込み茹でて柔らかくしたトウモロコシをすり潰して練り粉にしたのである。このトウモロコシ自体は、黄、黒、赤を初め、ありとあらゆる色の穂をしたのが皮を剥かれて、家の隅に保管してあった。毎日すこしづつ取り出しては皮を剥き、柔らかくするためにひとつまみの石灰と一緒に鍋に入れてグツグツと煮る。それからメタテの上に置き、石のグラインダーで挽いたあと、叩きながら形を整え、グリドル、すなわちフライパンのような鉄盤で焼かねばならない。ほとんど四六時中、すり杵がメタテに当たって軋む音、あるいは練り粉を叩くときのパタパタという大きな音が聞こえた。やっと夜が来たときは、いつでも朝食用の生パンがもうどっさりと出来上がっていたものだ。

そんなふうにはホセは忙しい母を眺めていて何故一緒に遊んでくれる時間がないのかと訝しく思った。確かに一日に数回は、大きな水瓶を肩に載せて自分と一緒に小川まで長い曲がりくねった道を下って行く、その水は彼の一家の人たち そう数家族分の ものとなるのだ。またときどき、夏の間は澄んだ川で水浴びをした。しかし夏といっても水は冷たく、石鹸は高価なのでたびたびというわけにもいかない。それに水中には、チャン<sup>10)</sup>として知られている不思議な動物がたくさん棲んでいた。もちろん雨期を除いてその姿を見た人は誰もいなくて、七つの色の縞模様を帯びて虹のように巨大な弧を描いて空に現れ、頭と尻尾を別々の泉に浸すほどだという。その姿、形はよく知られていないが、普段それらは目には見えない。牛のような角を生やし、蛇の胴体を持っている。無視する人を病気にする力を持っているため大事に扱わなければならない。

「川や泉の水は決して直接飲んではいけないよ、ペペ」と母から注意されたものである。「でないと、チャンに嘔まれるからね。父さんがしているように水はバシャバシャ手で洗ねて口の中に入れなさい」

トウモロコシ菓子と豆が彼らの食事の大部分を占めているとはいえ、季節毎に別の食べ物はあったし、規模は小さいが他の穀物や煙草、唐辛子<sup>チリ・ペッパー</sup>、それに南瓜もあったのである。南瓜というのは、細長く切り身して乾燥させておかないと、トウモロコシや豆のように長持ちしなかった。それよりも南瓜は収穫時に新鮮なまま食べる方がずっと多かった。地面に穴を掘り、石を並べ、これらの石が熱くなるまで穴のなかで火を点す。それから火を移し、代わりに穴全体を埋め尽くすほど南瓜を中に入れ、一晩中置いておく。朝になると、南瓜は完全に焼けていて美

味である。でも南瓜で一番いい部分は、種であって焼いて中を弾かせ、心を食べるのである。これは実に素晴らしいものだ！ ときに大きなサボテンの樹液をタププリ含んだ中央部分がこれと同じように料理される。

しかし春が来ると、これぞ正しく楽しい時！ 長い乾期の後の雨の季節の到来だ。春の雨こそは、北部メキシコの原住民の生活や経済にとっては極めて重要な要因であり、あらゆる利益がこの雨に依存しているほどなのである。突然ひび割れた大地が、緑の沃野に変わり、川にはまた水が新たに奔る。ウチワサボテン<sup>11)</sup>、別名オープンチアが新しい緑の葉っぱを出して、針を取り除いて茹でると、食べれるほどに柔らかくなるし、青色か赤紫色の<sup>ツナ</sup>実が葉っぱの上に現れる。ついでメスキュートやヴァムチリーの木が実を付ける準備にかかる。しかし、何と云っても最高なのはクジャクサボテン<sup>12)</sup>の時期で、その<sup>オーガン</sup>器官サボテンの甘美な果実なのである。

「クジャクサボテンが熟れた！クジャクサボテンが熟れたぞ！」ホセが他の子供たちと歌でも唱うように叫んでいる間に、年上の連中はもう、村を出てサボテン類が一番豊富な高地に行く仕度ができていた。つまりこの季節が終わるまでそこで腹一杯詰め込む積もりなのである。どこの家も、茅葺き屋根には一年中長い葦の棒が立てかけてあったが、それはこの嬉しい春が訪れると、この棒を使って高い枝からクジャクサボテンをもぎ取るからなのである。

どんな種類のものであれ、ペペ少年が肉を食べることはめったになかった。確かにアグイラ一家では少々鶏を飼っていたが、貧しいためにその多くは巡回の商人に売られ、その後もっと大きくて開けた街へと運ばれるのである。それに鶏に食わず乾燥トウモロコシさえも、この家の人たちには余り手に入らなかった。それでもペペは鶏や卵の味は知っていた。近所には僅かながら山羊も羊も豚も七面鳥も飼われていて、ときたまどれか一匹が屠殺されるという噂が広まった。裕福な家では何ポンドかを買って、細く切って吊し乾燥させた。アグイラ一家でも数日間は、肉が献立に加えられたのである。とびきり富裕な家で、馬や牛が少数ながら所有されていたが、これらは殺されることは滅多になかった。牛馬はむしろ富を象徴するもので、売るとなれば、メキシコの牧場に売られた。しかし何らかの理由で たいていは偶然の機会からなのだが 一頭が殺されると、その噂はまるでノスリのように何マイルも飛んで、人々はその肉を売ってくれるように、また恵んでくれるようにと群がったのである。

「でもな、昔はこんなことはなかったぞ！」ネストール老人は大声を上げた。「あの頃は国中いっぱい獲物がおってな、あゝ、まったくなあ。鹿なぞは、うようよしてたよ。兎もアライグマも鴨も鳩も！ でも今は、神様方がもう鹿を下さらんようになった、ワシら人間どもが神様方を大事にしなかったためじゃ。」

「鹿を下さるのはホントに神様なの、おじいちゃん？」

「そうじゃとも！」と老人は答えた。「動物たちは、ワシら人間の兄とも言えるあの朝星さまのお気に入りじゃないか？ だれでも鹿を獲りたいものは、まず七日間断食をしなくちゃなら

ん。それから祈祷棒と奉納の<sup>ロザリオ</sup>数珠を持って聖壇に行き、大兄に熊をお送り下さるようお願いする昔からのお祈りをしなくちゃならん。それでやっと熊を射つことができる。でも最初に殺した熊は自分で食っちゃいけない、他のひとたちにあげなくちゃならんし、また必ず、その脂身で蠟燭を作り、点さなくちゃならんのだ。むろん、ワシらは常に弓矢を使わなくちゃならん。他の武器で殺されたら、熊は腹を立てて、この国から出ていってしまうじゃろうからな」

「おもしろいねえー」幼いペベは呟いた。「それじゃ神様は他の動物も守っているの、おじいちゃん？」

「いやいや、とんでもない！ 鹿だけがお気にいりなんじゃ！ でもな、蠍は悪魔の牛じゃから家から追い出すためには、お祈りをし、ロザリオを入れた<sup>グールド・カップ</sup>瓢箪の盃一杯にトウモロコシ料理を作らならん。また山に棲む大蛇もいる。そいつらを捕まえるにはやっぱりお祈りをあげなならんのだ」

「おゝこわ！」ペベは声を上げた。「蛇を食べたことあるの？」

「小さい奴だけだけどな」ネストールは笑った。「それにイグワナもな。大きな蛇は、家の守り神として飼っているんだよ<sup>13)</sup>。家に持って帰ると、泥棒が来たら尻尾で地面を叩いてびっくりさせるように教え込まれるんだ。でも毎週木曜日には、パンを与えなくちゃならん」ここでネストールはにっこりした。「少なくともワシは爺様からそう聞いた。自分じゃ、家の中で大蛇を見たことはないけどな」

ホセ少年が家を出て旅にでかけるのはそれから何年も先のことだった。石ころや家財道具、ペットの犬、猫、ウズラと遊んで、周囲の世界のいろんな秘密を学んだ。一緒に遊ぶ仲間も近くにいたし、弓矢 大人が使えなくなって捨てた武器 それと世界中の男の子が好む玩具や大事にしている持ち物などもあったから。遊びに使える台所用品は少なく、鍋釜とか瓢箪だけだった。先住民はみなそうだが、テベカーノ族もほとんど子供に体罰を与えるということがなく、むしろ彼らが愛情深く、また精神的にものびのびと育つことを好むのである。布や砂糖を買うために最寄りのメキシコの村にときどき出かけたり、三、四マイル離れた親戚の家に行くことくらいがホセの行動範囲だった。おやつには、戸外の二股に分かれた樹木の上に出た空洞から蜂蜜を取り出して食べた。

次第にホセは両親の手伝いをするようになり、青年期の男子に期待されるような仕事のほとんどは、十四才になるまでにできるようになっていた。自然の食物を求めて父親のフランシスコに同行して山に出かけた。リュウゼツランの葉っぱは、最も探し求めた食材の一つだった。これを持ち帰って柔らかい外側を剥ぎ、固い内側の繊維を乾かすのである。これはイクスティと呼ばれ、そこからあらゆる種類の紐や縄が作られた。ホセは何時間も座って輪を回し、それに掛けた糸を父親が編んでいった。またあるときは日干し煉瓦を造るのを手伝い、泥を適度な堅さにこね、それを型の中に押し込み、そのまま放置して日干しにした。父親はまた簡単な<sup>はた</sup>機

でイクスティから丈夫な袋を作る方法を彼に教えた。

彼はまた、暇があれば、メキシコ人にとっての永遠の息抜きともいうべき、あの地下の宝物探しにその時間を費やしたものである。もちろん何も見つかりはしなかったが、探すこと自体が楽しみであり、それに革命時代<sup>14)</sup>にそこに隠されたという洞窟の中で途方もない宝が見つかったという話を何度聞かされたことか！ 決してありえないことではないのである。

ホセはもう、部族の成人男性が着る典型的な衣装を身につけてもよい年頃になっていた。裸で走り回ったのは二、三年くらいで長い間ではなかったが、少年時代の大部分は、とても服ともいえないようなものを着て済ませて来た。しかし年頃になると母親がシャツとズボンを一緒にした白い綿の服を作ってくれた。これは「<sup>シヴィライズド</sup>民度の高い」メキシコ人が好んで着る窮屈なズボンよりはるかに着心地がよいものだった。しかしながら、近くの町ではゆったりしたズボン(カラゾン)をはいて路上に出てくることを禁じていたので、どこかのインディアンの村でも少なくとも一着はズボン(パンタロン)を持っており、誰でも町に出かける人が借りれるようになっていた。ホセのズボンは小さい機を使って白黒の幾何学的文様に織りあげた<sup>フアハ</sup>帯、もしくは毛糸のベルトで支えられた。コスタルとして知られている同じ素材で織った小さな袋は、どこにいくときでも彼が手離さなかった持ちものだったが、それはこの中に、この子が大事にする何十という小間物の他に、マッチ、タバコ、それにとときどきは弁当などもあったが、およそ自分が所有する持ち物や必需品を一切合切詰め込んでいたからにほかならない。同様に部族の先祖も火を起す棒切れを持ち運んでいたし、彼の祖父たちは火打ち石と鉄を持ち歩いていた。しかしなにせこの文明開化のご時世、硫黄や蠟マッチなどは、貧しいメキシコのインディアンでも手に入れることができたので、ホセも随分早くからトウモロコシの莢で巻いた地元産のタバコの葉で作った巻き煙草を喫っていたのである。おそらく彼は、リュウゼツランの葉を編んだ巨大な尖った帽子、ソンプレロの広い縁の上に「メイキンズ」<sup>15)</sup>を載せて持ち歩いていたことだろう。これらに牛革製のサンダルを加えて彼の衣装は完成する。帽子は大変重かったが、これも慣習なのでそれを被るのはホセにとって誇りとなった。しかし最大の誇りはマチェテという、あらゆる男性が身に帯びる大きな鉄製のナイフであって、これは何であれ、およそ思いつく限りのありとあらゆることに役立った。初めて自分のマチェテを目にしたときにホセが感じた誇らしい気持ちは、誰にも負けないほど大きかった。

ホセは父親の畑仕事も手伝った。冬の間に二人で木や藪を伐り焼き払って土地を切り開いた。これはさほど難しいことではなかった。岩が多く痩せた山肌には立木、灌木は少なく、サボテンや草類は簡単に排除できたからである。そうして夏の最初の大雨が過ぎると、トウモロコシの種、ロザリオ、それにヒカラ<sup>原注2)</sup>の中に水とピノーレ<sup>原注3)</sup>を混ぜたものを持ってこの畑に出かけた。五日間の断食と沐浴は既に済ませていた。というのもこれはとても神聖で厳肅な行事であり、収穫の一切というわけではないが、その年の農作物の成功は彼ら二人に依存すること

になっていたからである。なぜならトウモロコシ神は、我らの父、天道さまの愛娘ではなかったか？　そこで彼らはうやうやしく畑の中央、さらに四隅にロザリオを置き、コーンミールを混ぜた水を主要な点に撒いたが、フランシスコは威儀を正して東に向き、昔から伝わる祝詞を捧げて父なる天道さまに御子をよく守り、大事に育てることを約束したのであった。それから棒で地面に小さな穴を空け、種を蒔き土を被せた。それでも刈り入れの時期までほとんど何の心配も要らなかった。ついでトウモロコシが大喜びで取り入れられたが、二本の茎、つまり双子のトウモロコシとして知られている枝分かれした茎の部分と二つの雌穂は最後まで残しておいた。このあと、父と息子は、これらの茎が残っている畑の周囲を厳かに何度も歩いて廻り、もう一度祈りを捧げて、父なる天道さまに御子を連れ帰ることの許しを祈願し、大事にお守りすることを再び誓ったのである。雌穂が付いているこれらの茎は、こうして束ねて集められ、家の棟木か木にくくりつけられた。その晩、ネストールは、父なる天道が、どのようにしてその愛娘のトウモロコシを人間の役に立つようにと地上に送ったか、また、彼女が夫である、トロアチェ（原注47）にいかにも虐待されて、つまり彼は、自分の愛人である鴉と穴熊を養うため、妻の持参金を使ってしまったというのであるが、その結果、トウモロコシは父のもとに帰ってしまった、という昔話をもう一度話して聞かせたのである。

「やがてわしらが収穫するはずの大量のトウモロコシにではなく、ほんの僅かなトウモロコシにあれだけ熱心にお祈りしなくちゃならんのは、そういうわけなんじゃよ」ネストール老人は言った。「じゃが、トロアチェは罰として逆さまにされ岩にくくりつけられたし、また人間が望むものはたとい何であっても聞き入れなくてはならんということになった」

ホセは利口な少年なので、この話を聞いてニッコリした。これは美しい寓話（たとえばなし）だと理解したからである。しかしネストール老人は、あきらかにそのまま信じているようであった。

この部族の人たちのやる仕事は、ほぼすべて個人のためのものであり、あるいは自分の家族のためのものであった。共通の利害を目的として行われるのは、宗教的、祝祭的な機会のみ過ぎなかった。しかし乾期がまたけなわという頃、ある日、父がホセに言った。

「ベベ（ベベチート）君、明日は二人で川に魚釣りに行くよ。おまえも、もう一緒についてこれる年齢になったからな」

翌日彼らは大袋にゴルダ　一日中、柔らかさを保てるほど普段よりずっと厚くしたトルティアー　を詰めて小川までトボトボと歩いた。川の近くまで来ると、同じ方向に向かう他の集団と一緒にになった。すべての道は、流れの早い幾つかの支流の川上に位置する、深い穴に向かって続いており、そこに魚は全部集まっていると考えられたのである。ここでみんなは一枚の敷物、やな　つまり葦をピッシリ敷き詰めて紐でむすんだ布　を作る作業に取りかかった。一方の端を長くして何個か石を付け重石にし底まで沈むようにした。こうすれば、やな全

体が、流れに曳きずられて動くときに一緒に魚を運ぶようになるというわけだ。このやなを作るのに丸一日かかり、夜になると疲れはてて皆、家に帰った。その翌日 あゝ！何て楽しい一日だったろうか。人々の叫び声とパチャパチャと水を洗ね返す音がそこここに満ちていた。釣り人たちが深い穴に飛び込んであの大きなやなによって隅に追い込まれた魚を小さな手網で捕えようとするとき、陽の光を浴びた、彼らのその黒い肌はキラキラと光り輝いた。そしてその夜は、多くの家で捕まえられた魚が鍋釜の中でジュージューと焼かれ、明るく楽しい夕餉となったのである。

ホセの背丈は中位だがスリムで、なかなかいい体型をしていた。手足は小さく形よく、目鼻立ちは大きめだが、決して下品ではない。瞳の色は黒くて生き生きと輝き、太く直毛の真っ黒い髪を長く伸ばしているが、口や顎の髭は薄く、体毛もまばらである。両親や祖父の時代では動物的だということで顎髭は引き抜いていたのだが、彼のような若い世代に属するものは、流行に合わせて切り揃え、刈り込んだりしていた。皮膚の色は濃い褐色である。必要とあらば、活動的になり、鋭敏で聡明なのであるが、ふだんは怠惰に傾きがちであった。結局、明日まで延ばしてできることをなぜ今日やらなくちゃいけないのか？ 嫌なことは、後回しにしておけば、その間に解決しているかもしれないし、また、楽しいことなら、なぜその期待を引き延ばして長く楽しんではいけないのか？ 人生には何の変化も、また選択の余地もほとんどないのだから、今日のうちに全部やってしまい、明日にすることがないというのは困るのではないか？

ホセはもちろん、喫煙は楽しんだが、すべて嗜好品は高価なので度を過ごすほどではなかった。また、隣の村々でメスカル、テキーラ、ソトールとして売られている、サボテンから作られるいろんな蒸留酒は手に入ればよく飲んだ。飲み過ぎる場合もあったが、強い酒は単調さから解放してくれた 酒を飲めば別な場所の、別の人間になれたから し、その変化を喜んだのである。むろん、酒の上の喧嘩はしょっちゅうで、刃傷沙汰も稀ではなかったが、しかしそんなことはちょっと時間が立てば許され忘れられたものであった。

他の人たちと同じく、ホセは気質的にもともと陽性で、また見方によっては、正直といってもよかった。彼は、知らないメキシコ人や米国人から、ものを盗んでも見つからなければ、それは大いに称賛に値する行為だと思っていたであろうが、しかし友人からは、決して盗むことはなかった。注意されなければややホラを吹く傾向があった。いつも陽気で歌を唱い、楽しそうで、くよくよ思い悩むことなどほとんどなかった。非常に気分に作用され易いのはどんな先住民にもいえることだが、他人の前で自分の情動をさらけ出すのは弱点だと思っている。彼の際だった特徴は、単に外面のみではなく、心の底から人には丁寧で、常に無力な人には援助の手を差し伸べようとしたり、不幸な人に対して同情を惜しまないという点だ。集中的な訓練のお陰で今はなんとか走り書きをしたり簡単なメモ程度のことを書くことはできるが、読み書きが自由とはいいいがたい。こうした学問・教養の不足、怠惰な傾向、あらゆる商取引についての

無知、さらには持続的な労働に対する嫌悪などによって工業中心の文明生活では惨めな落伍者となったであろうが、生まれ故郷のこの環境においては、立派な社会の一員だったのである。

ある年、乾期の合間であったが、トウモロコシの収穫が始まったあと、ホセは部族の数人の仲間と連れだって近くの鉱山の町にでかけた。人手が必要だったからであるが、ここで彼は初めて「高い」文明との接触を経験することになった。ここでピックルとシャベルを使って一日半ペソ 25 セントを稼いだのである。この賃金でも数カ月後に村に戻ることにしたときには、かなり貯めることができ比較的裕福な状態であったといえる。それというのも、村ではいかなる貨幣であれ、めったに顔を拝むことは稀で、実質的にはほとんど取引は物々交換によって行われているので、1ペソでも隣人から借りれば、ひどい借金をしたことになるからだ！ホセと同国人のボスは暢気で、部下の坑夫も働き過ぎることはなかったが、しかしアメリカ人の班長のやることは、まったく彼にはわからなかった。四六時中動いていて決して腰を下ろして休むことがないのである。おまけにこの男が話す、奇妙なスペイン語ときたら！ほとんどスラング中心の、罰当たりの代物であった。さらにまた、そこには多数の人間の代わりに働き、蒸気や電気で動く、驚くべき、また理解不能の、電話、電報、自動車、その他数え切れないほどの機械装置があった。

しかしホセの青春の日々を飾るもっとも楽しい思い出は祭りに関するものであった。このとき周囲の住民は、インディアンもその隣人も、この小さな村に集まってきた。<sup>フィエスタ</sup>アヴェ・マリアという人混みなんだ！よそいきの真っ赤なフランネルのペティコートを着込み、レボゾ<sup>(原注5)</sup>でその滑らかな黒髪を被った美しい少女たちの黒い瞳は興奮で輝き、その白い歯は光っている。白いズボンと洗い立てのシャツを着た男たちは、すべて帽子を新調して刀を磨き立てている。大抵は徒歩だが、もっと裕福なものは驢馬、ラバ、もしくは馬に乗って、というのは誰もワゴンをもっていないし、ワゴンは岩場の道を通れないからであるが、とにかく、すべての道はこの小村に通じているわけであった。あけっぴろげな交歓ぶりがそこここで見られた。大勢の仲間たち<sup>コンパドレ</sup>、旧友、知り合って間もないもの同士が互いの首を抱き合い、背中を叩き合うその合間に、強いソートルやテキーラの瓶が自由に回された。

この祭りは教会への共同奉仕作業から始まるのがよくあったが、なんといっても教会は、あらゆる活動の中心なのであるから。例えば壁を立てる必要があったら、それぞれが応分の貢献をした。子どもや女たちは小さな石を運び、成人男子は、運んできた木柱に大石を積み上げた。こうして一、二時間の共同作業で壁は完成したのである。午後は、スポーツ大会が行われる習わしであった。もっとも人気が高かったのは、<sup>コランド・デ・トロス</sup>闘牛であるが、裕福な若者が参加し、愛馬に跨って、雄牛のそばを駆け抜け、その尻尾を掴んで転倒させたのである。どれほどホセは、自分の馬を手に入れ、自ら剛勇ぶりを発揮して若い女の子の拍手喝采を獲ち得ることを望んだことだろうか！

「俺は、メキシコの大都市に行ってもいい、ともかく有名な闘牛士になって国中のアイドルになるんだ」と彼は考えた。

夜になると、その日を記念して花火が夜空に爆けてホセを大いに喜ばせし、ヴァイオリンに合わせてダンスが行われた。一日中、さらにほとんど夜を徹して祝祭は続いた。飴売りの店のテーブルがそこらに見られ、賑やかな商人の叫び声が辺りに届した。

「おいしい蜜柑だよ!」「四個で半リアル<sup>原注6)</sup>だ!」

「メロンの種! 完全に焼けているよ!」

「さとうきびいらんかね! とっても甘いよ!」

「キャンディはどう! 誰か買わんかね!」

この祭りの小遣いとしてリアル銀貨をもらった子どもは幸運だった。どんな品物でも大抵、1 センタボ<sup>17)</sup>の標準価格で売られることになっていたからである。

さて、隅っこの方に、近くの町のメキシコ人がカードの賭博を取り仕切り、周囲に人だかりができていたが、一方この男の相棒はリュウゼツランから造ったブランディーを売っていた。やがて、ひどい口喧嘩が持ち上がるのも必然であろう。確かに冒瀆的な激しい言葉が飛び交うだけだったし、ただ評判とか品位が下がるだけのことだったのだが、しかし酔っ払いの罵声がそこら中に飛び廻っているあいだは、女たちは姿を隠していた。取り返しのつかない傷害事件が発生するまえに、少数ながらも冷静な連中が仲裁に入ったものだが、常にそうとは限らず、やがて村の周囲に一つ、二つと粗末な十字架が置かれて、殺人事件が起った場所を無言で指し示すことになったのである。

アスケルタンで特別な祭りがおこなわれるのは、クリスマスの時期であり、このとき「羊飼い」という、あの古い野外劇が演じられた。何週間も前から出演者はすべてこの村の有力者であるが、白く長い衣装を用意したり、杖には色鮮やかな紙や、薄葉紙を張り付けたりして十分に時間をかけた。台詞や音楽は初期のスペイン人宣教師の当時から直に伝えられたものであり、キリスト生誕を聞いて巡礼に旅立つ羊飼いたちの艱難辛苦を描いたものであった。ホセの父、フランシスコは粗末な木製の仮面と、やはり木製の玉を繋いだ巨大な数珠<sup>ロザリオ</sup>を付けた隠者を演じた。その巡礼を阻止しようとするサタン<sup>18)</sup>の役を演じることがホセの願望であった。「ホセよ」ある日フランシスコが言った。「そろそろ身を固める気はないかい。おまえも十八になった。同じ年頃の友だちはもうほとんど結婚しているぞ。オレも、これ以上おまえを養うわけにはいけないから、そろそろ自立してくれなくちゃいけない。女の子との色恋沙汰は耳にタコができるほど聞かされたし、それに人妻も数人いた。それはもう、やめなくちゃな」

ここでドン・パンチョはにやりとした。というのも彼はこのハンサムな息子が大いに自慢だったし、その恋の噂話を楽しんでいたからである。ホセはヴァイオリンとギターの名手といってもよく、夜ともなれば同じ年頃の数人の仲間と連れだって藁葺き屋根の軒下に座り、美しく

澄んで乾燥した夜空に現れる星を眺めながら物悲しい恋唄を唱った。たいていの女の子はたちまちこの攻撃に陥落したもののだが、しかし一人だけ、何度攻勢をかけても、ことさら軽蔑を装いながら拒絶する娘がいて、むろんいま彼が一番手に入れたいと望んでいるのはこの娘だった。従って父親の教訓に対しても逃げ腰になりかけていた。

「でも父さん」彼は答える。「オレ、結婚したくはないよ、まだ。いやおそらく、ずっとね」

「何てことだ！」フランシスコは怒鳴った。「ヤンキーなら独り者でもかまわんさ！ 連中は、家政婦を雇って家事をやってもらえばいいからな。食堂で食べることだってできる。でも、おまえはなあ！ 誰がおまえのトルティーアをつくるんだ？ 誰がおまえの服を縫う？ 馬鹿なことを言うもんじゃない！」

妻を貰う、貰わないは、自分次第であることを知っていたホセは、何としてでも手に入れたい、カンディード・ゴンザレスの娘、ホセファへの求愛を急ぐ意味でももっと時間が欲しかった。「もう一月待ってよ、父さん」という彼の頼みをフランシスコは了解した。

そこで祖父のネストール老人を探し出した。恥ずかしさの余り、話を切り出しかねて口ごもっているのを見て、老練な老人はすべてを見抜いてしまった。

「さあ、さあ！」祖父は大きな声を出した。「言ってごらん。何事だね、女のことか？」ホセは本当のことを打ち明けた。老人は誇らしそうに胸を張った。

「おう、ほんまに、おまえも立派な男になったのう！ お爺ちゃんなら助けてくれると知っとたか！ 娘っこの愛を手に入れる方法を知っとる男は、今わたしの部族では他におらんぞ！ 今日の実夜中から一週間は必要じゃぞ。神様方、聖母マリア様のお気持ちを鎮めるのにわたしら二人とも五日間断食せならんからな。その娘の服を一着を持ってきてくれ、他の物はわしが見つけるから」

ホセにとって断食という観念はあまり気持ちのよいものではなかった。彼は若い世代の人間だし、老人たちの迷信について普段はほとんど問題にもしていなかった。が、それでも今彼は、窮地に立たされており、無力な人間の信仰にも似た、素直な気持ちで何でもやってみようと思ったのである。それで泣き言もいわず、断食に堪え、当の娘が井戸に水汲み出かしている間、こっそりその家に行って服を一着盗んできたのであった。

とうとう夜がやって来ると、老人は、神経の高揚と興奮、さらに自分の役割の重要性を心得ての醒めた威厳、それらが混ざり合った、奇妙な心的状態にあった。

「服は手に入れたか？」と熱心に訊いてくる。ホセはそれを老人に手渡した。

「それと、こんどはおまえの服があるな」慌てて探し回り、なんとか役にたちそうなのが、不用のものの中から一着見つかった。

老人は細心の注意を払ってそれぞれの衣服から人形を一つづつ、作りあげた。一つは男子の、他方は女子の。それから彼はその日一日を費やして探し出した五つの麻薬の原

料になる植物　　グイザッチェ、パロ・ムラート、ガランプロ、マリアのバラ、トロアチェ

の花を咲かせるや、その花で少年をあらゆる人形を飾った。満天の星が真夜中を示すころにキャンドルに火が点され二つの人形は、大きな水瓶に移されて浮かんだ。ホセは息を殺して眺めていた。結果そのものに関しては大して信用してはいなかったものの、魔術のもつ力、夜の静けさ、それに老人の気分　　このときまでにほとんど自己催眠状態に達していた　　が一体となって深い影響力を醸し出していた。恭しくまた低く張りつめた声で老人は、酔いどれ女と花男に向かって恋い焦がれる男を恋人のもとに連れていかれよ、と祈願する古い祈りを吟唱したのである。このあと、彼は楽器の弦を持ち出してきて、逆さまに地面に置かれた瓶の上に乗せ、これを足で支えた。二本の短い<sup>スティック</sup>棒でこの弦を弾いて響きのよい音を出し、この場に相応しい古い唄を唱い出したのである。五回唱うと、それから飛び上がり、人形が浮かんでいる瓶の周りを五度廻った。呪文はこれで完璧となった。熱心に瓶の中を覗き込み、二つの人形が一緒に浮かんで漂っていることを確かめた。嬉しそうにホセの方に向くと、高揚した感情を押さえるようにただ短く、こう言っただけであった。

「うまくいった。神様方も、聖母様もおまえの祈りを聞いて下さったぞ」ホセは安心した。彼は心の底では、呪いの効果を疑っていたのだが、老人の情動が彼にかなりの影響を及ぼしていたからである。そんなわけで朝になれば、彼は三度の食事を摂るのも、甘美なホセファの心を掴もうとアタックするのにもさらに確信を深めることができたほどであったから、ついにこの件にケリをつけれるという自信がついた。

「父さん」と次の日、彼は言った。「ホセファのことでカンディード・ゴンザレスに話してくれないかな？」父親はニヤリとした。

「ほう、風向きがよくなったな！　この件はこれで決着つくと思うよ。こんな有望な男を義理の息子に欲しくなければ、ドン・カンディードは、バカというもんだ」

婚約に至るまでには片づけなければならない多くのことがあったし、子供の結婚という問題は、軽々しく決めてしまうには余りにも重要な事件であるから、フランシスコもカンディードもそのまえに何度も長い話し合いをもった。二人はあらゆる観点から、また何度も一から出直してこの件を議論した。しかしながら、たとえこれよりはるかに重大な事柄であっても、話というものは最後には出尽くしてしまうものであるから、そこで饒舌なドン・パンチョも、また同じくらい饒舌なドン・カンディードにしても、もはやこれ以上話し合う話題は思いつかない、というときがやってきて、正式に婚儀を整えようということで一致したのであった。若い二人は、司祭が次にやってくるまで待ってそれから結婚することになったのである。

しかしここでネストール老人が猛烈な反対をしてきた。彼はここではカンタドール・マヨール、つまり最大<sup>ザ・チーフ・シンガー</sup>の歌い手にして、古い宗教の高位の神官、かつまた古い慣習の守護者であるから、古い神々の怒りによってこの部族が崩壊し破壊されるのを防ごうとして最善を尽くした、

というわけなのである。若い世代の人々は、古い神々や先祖伝来の風習を見捨てていた。もはや昔ながらの儀式に参加せず、神々に祈ったり犠牲を捧げたりすることもなく、断食を行うことも祈禱棒を作ったりすることもなくなっていた。部族の言語でさえ、ほとんど死滅寸前の状態であったので、神々は怒りの余り、この部族が年々衰え、縮小していくのにも目を瞑っていたのだ。春になれば今でも雨乞いを行うのも、彼のような少数の献身的な保守主義者の熱狂的行為に過ぎなかった。たった一人の孫が、昔からの儀式も行わず結婚するなんてことを許せるだろうか？ とんでもない、否である！ そのうえ、彼は古い祈りを未だに憶えている数少ない人間の一人だったし、この祈りをあげたものに一晚、1ペソ支払うのがしきたりだったのだから。老人は、司祭がペペの結婚式を執り行うことに関しては何の異存もなかった。神さまの数は多ければ多いほどよいのだから。しかし自分の特権と古い習慣は守ってくれ、と彼は主張したのである。

そこで、老人を喜ばすためにも、またその気持ちを落ちつかせるためにも、古い習慣に従おうということになり、次の水曜日の晩、三人、つまりネストール、フランシスコ、ホセが、娘の家に赴くこととなったのである。狭く険しく岩の多い道をつまづきながら、彼らはとうとうその家に着き、カンディードの丁寧な出迎えを受けた。戸口の側に腰を下ろすと、ネストールが早速祝詞。それは長い極めて厳粛な詠だった。をあげ始めた。彼は天上における少女の創造と、地上に誕生するまでの彼女のその長いきすらいについての美しい寓話について語った。ついにその長い吟唱は終わり、一行は再び家路についた。

それからあとも、水曜日と土曜日のみ五夜続けてこれは繰り返され、その最後の晩、ネストールの特訓をソツなくこなしたカンディードが、老人の話が終わると立ち上がり、数世紀のあいだテペカーノの花婿・花嫁に奉仕してきた伝統的な慣習に則って恭しく返答を行ったのであった。娘は怠け者で役立たずであることを認めた上で、彼は、その娘を貰ってくれることを名譽に思うなどと感謝し、神々に罪の赦しを求め、健康を祈願して話を終えた。それから白い布を持ち出して、その上に娘の所持品、持参の品々を山のように載せた。

それから四人全員。花嫁、花婿とその両親。がその布の四隅を掴んで持ち上げ、それで儀式は完了した。ホセは、新しい自分の家が完成し、家の中が片づいて妻を住まわせる前の数ヶ月、妻の実家に寝泊まりした。司祭さまがやってきてこの次にミサが開かれたときに、彼らはその前に姿を見せて、聖教会の式典に従って結婚式を挙げたのである。

ある日、憂鬱そうな男がネストールの小さな家の前に現れたので、老人はよろばいながら外に出て客を出迎えた。

「さあ、入った、入った！ 何が悲しい？ いったいどうしたのだ？」

「妻のことなのですよ、お爺ちゃん」ホセは答える。「ひどい病気に罹ったのです。何でもできることはやりました。美味しいものを持ってきて食べさせたのですが、いっこうに効き目が

ないんです。助けてやってくれませんか？」

老人は、自負心と怒りに軽蔑の入り交じる興奮状態から呼吸が荒くなった。

「あゝ、この婆さんたちに一体何が期待できるかね？ 何かの霊を宥めたり、やつつける必要があるときに、連中は食べ物やら薬やらで病気を治そうとするんじゃないからなあ！ おまえがここに来たのは確かに正解だったよ。さあ、どうしたらよいか考えよう」老人は家の中に消えたが、これから必要になるいろんな物を選んで袋の中に詰めて姿を見せ、一緒にホセの住む家に向かって歩き出した。

まこと、ホセファは惨めな状態で床の敷物の上に寝ていた。専門的知識のある<sup>シヴィライズド</sup>医者なら、彼女の病気をマラリアと診断してキニーネを服用し原油を撒くことを指示したことであろう。後者は淀んだ水たまりの蚊に対する措置である。同情した数人の隣人たちが彼女を囲んで、心を込めて準備した食べ物を一口、二口試してみたら、と勧めている。

「ほんとに僕も出来るだけのことはやったんですよ、お爺ちゃん」悲しそうにホセは言った。「言われた通りに患部に口を当てて吸い出したんですが、何も出てきませんでしたし、それから煙草の煙を体中に吹きかけて祈ったんですがね、何の効き目もありませんよ」

「そうじゃろうて、よしよし。でもな、こうした事には経験が必要じゃし、神様方から信用されなくちゃならんのだ。おそらく、これはおまえの敵の誰かの仕業じゃ。ともかくわしを呼んだのは大正解だった。霊力、気力を兼ね備えた霊能者は、ここではわし以外誰もおらんでな」

隣人たちを家に帰したあと、老人はホセに妻の病気の原因を特定しようとして彼が犯した怠慢の罪だの、遂行の罪だの、根堀り葉堀り聞き始めた。彼らが病気になることを願うような敵が、二人のどちらかにいやしないか？ かつての恋敵の中の一人、二人を除いてホセにこれといって思い浮かべるような人物はいなかった。新居を建てる時、チャンを鎮めるように十分気を使ったか？ ホセはこうした事を完全に忘れていたことを認めざるを得なかった。

「なあ、おまえ」老人は悲しそうに言った。「おまえたち若い者は、わしらを笑うし、わしらが愚かだと思っているが、そのくせ、いざ困ったときにはわしらに頼り、助けを求めてやってこなければならんのは、まさにおまえらの、その頑固さの故なんだ！ うん、まあ、若いときはみんなそんなもんだがね。さてどうしたらよいものかな」

老人は、ホセファを仰向けに寝せ、自分はその足下に立った。トウモロコシの莢と煙草の葉から作った巻タバコに火を点けると、真剣な態度に変わり、やがて急速に催眠状態に入った。煙を大きく吸い込むや、四つの主要な点に順々に向かい、各々の方向にパッとその煙を吹きかけたあと、それから低い張りつめた声で祈りをあげ、病気がこの女から去り、この女が健康に復するようにと祈願したのであった。ついで五回、煙を患者の両手、両足、額に吹きかけ、四つん這いになると、彼女の身体の端の方から患部へ向かって何度も素早く撫で始め、何度もその場所を強く吸い出したのである。最後に立ち上がるや、口一杯に含んだ血をペッと片手に吐

き出した。張りつめ緊張しきったような老人の態度は急速に消えて、やがて次のように重々しく言った。

「これはやっかいな問題だよ、ペビート。チャンの仕業ではないぞ。もしそうなら、吐き出したものは、全部唾だったはずだ。血が混じっていたのは、魔術のせいなのだ！」

「こいつは実に微妙な問題だ」ネストールは続けた。「わしほど強力な呪い師に面倒をみてもらえておまえは幸運だよ。この病気を正しく診断するには、断食やら祈祷やらでオレでも一週間かかるけどな。だからたとえ愛する孫のためであっても、標準の診療費5ペソ以下ではとも引き受けれん」

半時間話し合っただけでその件は穏やかに解決した。そこで一週間老人は沐浴、断食、祈祷を行い、この期間の終わりには断食による体力の衰弱と相俟って、<sup>ビジョン</sup>幻を見れるほどの高揚状態に達していたのである。七日目の夜、ふたたび若者の前に姿を見せたが、ことの重大性が明らかに重く彼の心にのしかかっていた。

「全部わかったよ」彼は無造作に言った。「若い男だ。誰か分かるほどはつきり姿は見えなかったが、でも彼女の衣服で人形を作り、釘を打ち込む一方で、また別な人間があの子が病気になって死ぬように呪っておるんだ」

嵐のような憎悪がホセを遅い、激しい言葉で彼はその犯人を呪った。ネストール老人が威厳をもって語ったことにもはや何の疑いも抱かなかった。呪術を用いて敵に危害を与える方法を述べた昔話のことなどはよく耳にしたことはあったが、まったく信用していなかった。しかしいまや自分がその被害者なのである！彼は疑わしい人物の名前を心の中にあれこれと思い浮かべた。先の祭りで口喧嘩をしたパブロ・ヘルナンデスが頭に浮かび、先月トウモロコシの販売でホセがインチキをしたと主張しているペドロ・マルティネスのこと。いや、まてよ！マルガリート・デ・ラ・ローザ、この男はホセファをめぐる争った恋敵だったではないか。考えれば考えるほど、こいつに違いない、という確信のようなものが生まれた。よし、奴に決まった！

ネストールは真剣にまた冷静に施術を始めたが、それは、医者なら誰でもそうであるように、彼もまた、治療の半分は患者の信頼を獲ち得ることにあることがよくわかっていたからだ。まず真っ直ぐ伸びた木材から作った矢を束ねたものを持ち出したが、いずれの矢も、その丸っこい根元から驚か、赤尾鷹の大きな羽毛が一枚、垂れていた。これらは悪と病気を攻撃する矢玉であった。そのうち三本を、患者の頭近くの地面に突き刺し、もう一本を足下に刺した。ついでそれらの矢を使って 場所を代えたりもして 四つの主要な方向を指したり、患者を浄めるためにその頭の上で振ったり、様々な動作をした。最後に四つん這いになってもう一度、患部に口をあてて吸い始めた。数カ所を試したあと、大変興奮して 顔は激怒したように赤く 立ち上がると、べっと口の中のものを手に吐き出してホセに見せたところ、何と一本のピンだった！ホセは驚愕のあまり声も出さず息を弾ませ、ハアハアと喘いでいた。

ところで、老人が吸い出すまえに口の中にそのピンを隠していたのは間違いないが、それでも何かに憑かれたように彼の動作や雰囲気あまりにも激しいものであったために、まったくインチキだと気づかれなかったのであろう。ホセに関していえば、その目で確かに見ていたことではなかったか？ まさに人形に打ち込まれたあのピンが、彼の妻の身体から取り出されたことを現しているのだ！ したがってこれは、果たし合<sup>グー</sup>いを意味しているのではないか？ よし、これは単なる遊び以上の試合 果たし合<sup>グー</sup>い、なのだ。このときから、彼は復讐を誓ったのである。

かなりの間一人でこの計画をあれこれ思いめぐらしたあげく、再び彼はネストールに相談して自分の疑惑を打ち明けたのである。老人は真剣な面もちで頷いた。

「まず奴に違いあるまい」と同意した。「改めて考えてみると、わしが幻覚の中で見た人物もよく似ておった。もちろん、いまではハッキリその姿を見ることができがのう。それに奴を助けている、その恥知らずの年寄り、エレノ・モンテスで、わしより力は上だと考えておる男じゃ。間違いない。よし、よし、思い知らせてやるさ」そこで二人の共謀者は、最終的にはマルガリートとエレノの死を念頭において密かに計画を練ったのであった。

さて、それから数日後、夜も更けた頃、村はずれの人目につかない、ある場所で二人は出会った。

「<sup>めくらまし</sup>幻術はいろいろとあるから」ネストールは十字を切ってから話し始めた。「おまえも憶えるといいぞ。一つは綿で人形を作り、墓地に埋めるんじゃが、月曜日に一日断食したあと、夜は蠟燭に火を点し、どっかの墓石の前にその人形を置く。これを月曜日の夜毎に四回繰り返し、最後の晩、川から黒い石を取ってきて人形の頭の先の地面を五度叩く。それから蠟燭が消える前に家まで走って戻る。人形は死体を示しており、おまえの敵は、五ヶ月以内に病気に罹って死んでしまうじゃ。でも全部で二十九日間断食せねばならんぞ」

ホセは身震いしながら、幽霊を恐れる人がよくやるような所作でおずおずと暗闇を窺うようにした。仇を討つ方法も、断食もどちらも彼の気に入らなかった。しかしネストールは、信心深い様子でその話題を蒸し返してきた。

「しかしもっと良い方法は、手足も頭も口もチャンとある人形を綿で作ってさ、死装束を着せ、それを五本の棘でもって頭も心臓もズタズタに引き裂いてやる。ほどなく犠牲者は、胃が悪くなるし心臓は腐ってくる おゝ神様、この男にどうぞお慈悲のほどを！」ネストールは、ほくそえんだ。「これもまた実にキレイなやり方だ！ おそらく奴等がホセファに試したのもこの方法だろうて。ワシのおかげでこれに対抗できるのは運がイイぞ！」

蒙った悪業に思いを致していると、再びホセの心には怒りが募ってきて、悪人どもに対して冷酷、非情もやむなし、という気がしてくる。

「さらにもう一つのやり方は」ネストールは言葉を継いで「粘土の人形を作り、これを真つ

昼間、蟻塚に埋めることだ。おまえは一日食を絶ち、ロザリオを数え蠟燭に火を点している間お題目を七回あげなくちゃならん。蠟燭が消えたら、蟻が這い上がって来るだろうが、五日後に敵は、腫れ物や蕁麻疹が出て苦しみ、熱病で死んでしまうだろう」

「それは怖ろしい死に方だねえ、お爺ちゃん！」ホセが口を挟んだ。「そんなこと、できないよ！」

「ところがだ、まだあるぞ、一番イイのがな。これを知っている奴はほとんどいないが、おまえには秘訣を教えてやろう」その声が低くなり、ほとんど囁き声になった。

「初めに死人の右手の骨を一本抜き取らなくちゃならん。誰も見ていない間にこれを敵の家の藁葺き屋根の中に隠すのだ。そうすると、その日の夜、奴は黒い、物の怪を見ることだろうし、次の夜には家の後ろで嘆き悲しんでいる怖ろしい幻を見るだろう。呪物を見つけて取り除かない限り、奴さん、苦しみもがくだろうし、そうこうするうち、とうとうこの家のものは全員、ガラガラ蛇だの、百足、タランチュラ、毒蜥蜴、毒蜘蛛、蠍なんぞの怖ろしい動物の悪夢に悩まされて死んでしまうだろうて」

しかしとても最後まで聞いてはおれず、ホセは途中、まるでこれらの魔物に追いかけてでもいるかのようにして家に帰った。ほかのものなら、気が向けば魔術に手を出すかもしれないが、自分には向いていない。俺は、マルガリートなんかとは違う、拳が山刀<sup>マチエテ</sup>で決着をつけよう！

この事件によってホセはネストール老人に一層親近感を持つようになった。その上彼自身の人生も成年期にさしかかっており、青年期特有のあの懐疑的な態度から距離を置こうとし始めていたし、古い宗教や祖先の習慣に興味を抱き始めたその矢先だった。若い世代々の怠慢に立腹した神々によって部族が絶滅されるのを防ぐのは、我々老人の信仰によるしかないと感じている、ネストールら少数の献身的で忠実な保守主義者のおかげで、辛うじて古い慣習が生き残っている、ということを彼はよく知っていたのである。若ものたちは、保守主義者を愚かで害のない、おいぼれとみなし、その宗教を滑稽な迷信と考えていた。この点において、彼らは古い信仰の根絶を切望する、カトリックの神父<sup>パドレ</sup>に奨励されているとあってよかった。にもかかわらず、この神父は、強制と力によって達成されることは少ない、ということをしきり言っているくらいで、人間性について熟知していたし、教会は古い、異教の教えと戦うよりも、それらに新たな解釈を加えて自らの中に摂り込むことの方がずっとまじだ、と常に考えてきた、そのことを思い出すくらい教会史にも明るかったのである。したがってこの旧体制維持派は、みずからをまったく善良なカトリック教徒とみなしており、新旧の宗教の間に何ら敵対関係を認めていなかった。例の問題でホセに近づいたとき、ネストールには、孫がどうやら自分を受け入れてくれそうな状態になった、と思った。

「なあ、ホセよ。わしのたった一人の孫であるおまえが、このテペカーノ族古来の信仰を維

持する少数派に与していないというのは、かねがね残念に思っていたんだ。しかし若者とはそんなものだからなあ。わしだって、おまえくらいの年まではほとんど祭礼に出たことはなかったんだ、あのころの老人はみんな忠実で信仰心が篤かったんだが。しかしおまえももう、じつくり物事を判断できる年齢になった。助言を求められたりもすれば、自分の行動が人の模範になるくらい、影響力を持つことだってある。もうおまえがわしらの信仰を笑っていないのは知っている。何度かわしに聞いてきたからな。でもまだ入会はしてらん。これ以上遅らしてはならんぞ、ペベ。われらが父、太陽はおまえを受けとめようと御手を差し伸べておられる。今日は1月5日じゃ。今宵、わしらはピノーレ祭り<sup>18</sup>を行う。これに出て入信せい！」

ホセの理解するところでは、ペヨーテ<sup>19</sup>の幻覚的作用と、祭りの準備に伴う長い断食の効果が相俟って老人の精神はいま、一種、恍惚とし高揚した状態にあるらしかった。断れば老人を怒らせることになるだろうし、それに彼は入会手続きに宗教的な関心と同時にまた好奇心も感じていたのである。

「行きます」彼は短く答えた。

太陽が西の山々の背後に沈んだとき、ホセとネストールは祝祭の行われる場所に向かってつづらおり葛折の道を歩いた。ちょうど暗くなったころ、二人は小さな丘陵の頂に位置する、とある家のパティオの中庭にやってきた。むろん幼い頃ホセは数しれぬほど前から何世代にもわたって守旧派の祭りが行われてきた、このような中庭に足を踏み入れたことが何度もあった。全体の形もよく知っており、中央に火が燃やされる場所となる円い平地、拝領者たち<sup>20</sup>の席として設けられた環状の石、踊り手の座る場所は用意されていない円形の小径、さらに東側に石の粗末な祭壇があった。しかしいまやすべてのことが、新しい意味を帯びていた。

到着するやただちに、ネストールとホセは規定に従って五度ほどこの中庭を巡り、そのあと祭壇の前で叩頭したが、この間ネストールは低い声で祈りをずうっと唱えていたのである。神殿を用意し飾り立てるため神の許しを乞う、この祈祷の意味がわかる程度のテベカーノ語をペベは修得していた。こののち彼らは地面の上に生えたあらゆる草類を駆除し、表面が平らで滑らかになるまで掃き浄め、中央の火を起こした。

ネストールはそれから祭壇の周りで忙しく動き、箱を開け儀式において重要な多くの品を取り出してはそれを壇上の決まった場所に置いたのがホセの目に入った。長い時間をかけて注意しながらあらゆる品物の紐を解き、またそれを置くときにも大変な気遣いを示したのである。ホセの方は中庭を掃き浄め、火の勢いを案配し、目の端で祖父の動きを観察した。やっと老人が振り向き彼に声を掛けた。

「ホセ君」老人は自分の仕事の出来映えを腕の良い職人のような誇りをもって見回しながら言った。「おまえもわしらの宗教に関係するいろんなことを理解した方がいいな。おそらくこの村の不信心な連中がまき散らす悪質な噂や嘘をも聞いたことがあるう。わしらは偶像を拝ん

でいるとか、神聖なカトリックと正反対の悪魔と結託しとるとか言い触らしてある。とんでもない！全部嘘っぱちだ。わしらはちょうど教会で歌を唱い祈りをあげるようにわしらの神様を拜んどるだけだ。神父様が教会の指導者ならわしがこちらの指導者なんじゃ。聖杯とか秘蹟がカトリックで必要なようにわしらでもここにあるような物が必要なんだ。教会の聖像がこの町を悪魔から守ってくれるように、こうしたものがわしらの健康を保証をし、病気を直し、作物に雨をもたらししてくれるんじゃないよ。ホレ、これを見てみい！この白い布がタペステ<sup>21)</sup>で、大きな白い雨雲で一杯になった天を表しとるわけだ。この三角形の枠の上に並んでいる、色着きの糸で織りあげた菱形の小さい品物はおまえもよく知っておろう。つまりこれらはチマレ<sup>22)</sup>、すなわち、盾であって我らが神、太陽のお顔を示しておるのじゃな。これによって我々は悪霊から守ってもらえるわけだが、しかし同時に雨を遠ざけることにもなるので雨期が過ぎるまでは怖くて作れない。これらの矢もよく知っているな。病気や悪から積極的にわしらを守ってくれるもので、高貴な鷲と赤尾鷹の羽毛が吊してある」

「どうしてそれだけ？」ホセが口を挟んだ。

「二つの鳥は最も強力で素早く、また強い。それで矢玉も早く強く、また真っ直ぐ飛ぶことができるんだ。これらの矢のおかげで人間は病気や諸悪から浄められる。それから綿の房を巻きつけたこれらの棒は、<sup>バストンシス</sup>錫杖<sup>23)</sup>という。もちろん、綿は大雨雲を示し、清めに役立つが、作物に必要な雨をもたらす。これらのものは全部目にしておるだろうし、またよく知っていよう。でもこっちにある、これらのものは小さいけど、とても大事な物で、おまえはおそらく知ってはいまい」

ネストールは祭壇の前部を指さしたが、そこには七つか八つ、<sup>ヒカラ</sup>瓢箪の椀が置かれてあった。そのうちの幾つかは裏も表も表面を密蝟で艶だしされ、様々な色のガラスのピースからなる図柄で装飾されていたが、全部、綿の苗床の上にあるはずのいろんな細々した物が中に入っていた。多くは奇妙な、また珍しい形や色の自然石であり、またこの地方の古代の人たちが作り、ときどき現代人によって発見される、小さな彫刻品とか、そのようなものであった。また僅かながらそのうちのあるものは、この二人の観察者は気づかなかったが、外国で量産された物なのであった。

「これらのものは」ネストール老人は厳かに言った。「シドカム<sup>24)</sup>じゃが、わしらの『偶像』と呼ばれることもある。もちろんそうではない。しかし非常に強力でまた貴重なものであるので、保管には注意を払っている。信仰心と観察力のあるものが見つかるようにと、神様方が残して置かれた場所で見つっている。それを見つけたものは、悪や病気から守られ、また健康と富、幸福をも授かるのだ。<sup>ザ・チーフ・シンガー</sup>祭司長であるわしは、最も強力なのをたくさんもっている、それがわが身のみならず、プエブ口族全体を守ってくれるわけじゃ。なのに、人はこれらを気にも留めず、わしのこの貴重な宝ものを見ては笑い、この祭儀に参加するのを断ったりしよる。

しかしいまに思い知らしてやる！ 神様方も無視されていつまでも黙ってはいなさるまい。すでにわしらの若いころと世の中は随分変わってきている。むかしは雨はもっと長く激しく降ったし、トウモロコシはもっとたくさん<sup>な</sup>生った、鹿の数もずっと多かった。わしが生きている間は、信仰の火は消えないが、さて誰がわしの跡を継ぐのじゃ？ 今の若い世代には、祈祷も、祭式の歌謡の細かい規定も知るものは誰一人おらん。いやとにかく、わしはみんなの怠慢の罪をこの身に引き受け、罪の結果引き起こされる災厄からみんなを救ってやるのに全力を尽くすだけだ。

「ほら」彼は綺麗に装飾された椀の中の綿床の上に置かれた円形の物体を指で示して叫んだ。「ここに一番強力なものがある。この部族にこんなのは他にないし、世界中にもこれと同じ物は二つとないのだ。」

彼は綿床から恭しく、またいとおしむようにその球体を持ち上げた。現代のアメリカなら、たとえ小学校の生徒でも、これは真ん中に螺旋状の縞目の入った大きなガラス状の大理石だとわかるであろう。しかしネストールとホセにとってそれは世にも不思議なもので、その美しい、整った形と色は大いに目の保養となったのである。

「これは確かに雨の精じゃ」老人は小声で言った。「見てみい！この水のように透明で真ん中に雨が渦巻いておる<sup>さま</sup>態を。もしこれがこの国から無くなったり、奪い取られたりしたら、きっと雨の精もその跡を追って、結果日照りのためにわしらはみんな餓死してしまうだろう」と言いながら老人は恭しくそれを元の場所に戻したのである。

「ここにあるのは、月を表したものじゃ、白くて円いだろ？ それからこれは明らかに鹿の精じゃな。ほら見てみい、いかにこれが角に似ておるかを。ここにあるこれは、きっとチマレじゃろう。それと、これらのものは じゃが人がたくさんやってきた！」

中庭の中央に赤々と輝く光の中に三人の初老の人々がやってきた。彼らは守旧派の中心人物であったから、もちろんホセはよく知っていた。五回ぐるっと廻ってから祭壇の前で立ち止まり、囁くように祈りを唱えたあとで二人に挨拶をした。このときより<sup>コミュニケーション</sup>聖体拝受者はゆっくりと集まり始め、八時までには約十二人になった。女性も僅かながら来ていたが、環の外に留まって焚き火をし、儀式に参加することはなかった。

程なくネストールは昔、獵師が使ったような弓を持ち出して弾けば響きのよい音が出るまで弦をきつく張った。それから椅子の前の地面をさっと掘り、穴を空けると、その上に瓢箪の鉢を逆さまにしてかぶせ、弦を上弓を持ち、その音に共鳴するように鉢を足で固定した。二本の棒を選んで撥にし儀式はいよいよこれから始まるころである。しかしまずホセを呼んで何百年ものあいだ、語り継がれてきた古い文句の一つを述べてその晩の火の世話を彼に任せることを伝えた。それから中央の座席に落ちつくとも両側に一人づつ老人が座った。彼らはそれぞれ片手に祭壇にあった儀式用の矢を一本握っていた。長老たるネストールが祭りの開始を告げる

伝統的な祈りを捧げるあいだ、ゆっくりと振られ、順番に東北西南の方向へ向けられた。これが終わると、どっかりと椅子に座り直した老人は、手に持った二本の撥を振るって弓を打つと、ぶわ～ん、ぶわ～んという音が出た。すると彼はこの単調な弦の伴奏に合わせて低い声で唱い始めた。ホセは他の老人たちに従って起き上がり、真剣な、またゆっくりした弾むような足どりで環になってぐるぐると踊ったが、四つの主要な方角、特に東の祭壇の方向に来ると、ほんの一瞬、歩みを停めてそちらへ顔を向けたのである。

かくしてその長い夜は過ぎた。北極星の周囲を明るい星の群が巡り、まるでその澄み切った高みにおいてのみ、光ることができるかのように輝き瞬いたのである。ほんの短い休憩を除いて老人は唱った。全部で四つに過ぎなかったが、しかしいずれも非常に長く、単調な繰り返しが無限にあった。歌は神々やこの世の起源について語り、生命を育む水によってこの世を更新するために雨が降るのだと唱った。ホセは真面目に火の管理に務めたので、一つ一つの歌については少なくともその一部しか他の人々と踊ることことが出来なかった。

とうとう東の山の端に天の炬火とでも言おうか、きらめく明けの明星が姿を見せたとき、みんなは恭しくお辞儀をした。やがて偉大な太陽自身が、その灼熱の体内から発する光と温みを遠く外に拡げ始め、そして遂に東の峰にその輝く顔を覗かせたのであった。ホセにとってこれほど太陽が荘厳に見えたことはなかったし、その夜が冷え込んだだけに、その暖かさがこれほどありがたく思われたこともまたなかったのである。

ちょうどこの頃、ネストールは太陽に向かって最後の歌を唱い終え、こうして祭りもほとんど終わりを迎えようとしていた。もう一度他の二人の老人が彼の側の石の座席に座って、部族一ザ・チーフ・の歌い手シンガーが祈禱を唱えて式を終えようとする間に、再び聖なる矢を主要な四つの方向に向けた。それから一人また一人と、全員が祭壇に近づいてタマレ原注7)を少し貰って食べる間に、ネストールはペヨーテに浸した羽毛を付けた矢を彼らの頭上に振りかざしてあらゆる病や邪悪が退散するように浄めを行ったのである。それぞれの片手に二、三滴の水が注がれ、さらにトウモロコシ粥を混ぜた水が祭壇の上に、座席の上に振り撒かれた。祭壇の上の御物が集められ、箱に納められると、ネストールに率いられた参加者全員が、中庭を五度仰々しく廻って、ここに儀式は修了した。ホセは家に帰って、その日は一日中寝て過ごした。

保守派が維持しようとする信仰や風習に対しては未だに嘲笑いいたくなる気持ちは残っていたがしかし、目の前で行われた儀式は確かにホセの上にかかなりの影響を及ぼすことになった。それで彼は古い宗教に本気で関心を示し始め、また科学者が研究に打ち込むような態度で取り組んだのである。彼とネストールは何度も会って長い間話しこんだ。つまり老人は激しく熱狂的な情報提供者で、若者は好奇心に満ちた聞き手であるとともに鋭い質問を飛ばす研究者だった。もちろん、テレビカーノ族なら誰でもそうであるように、彼もまた古い信仰の根本的な部分は既に理解していたし、父なる太陽、母である月、長兄たる明の明星の三位が、如何にして彼らの

民を見守り保護するか、父なる太陽は、いかに娘であるトウモロコシを世界に下して食料をもたらしてくれるか、さらにまた、人間が弓とチマルを使って歌や踊りでもてなし唱ってもらっただけで神々はいかにこのトウモロコシが育つように春夏には待望の、また必要不可欠の雨を送ってくれるかを理解していたのである。しかし細々した秘伝の数々が彼の新たな興味を唆る領域となった。ホセはいろんな場面で行うよう指定された祈祷、四月の雨、九月のトウモロコシの実り、一月のトウモロコシ粥、それに三月の双生のトウモロコシという四大祭りで唱われる式典歌を憶えた。彼は断食や、祭司長ザ・チーフ・シンガーに対して命じられる節制などの物忌みタブーについて、それからとりわけ、あらゆる儀式において非常な効果を発揮するペヨーテの魔力とその影響力について聞き及んだ。多くの種類の弓やチマレの作り方を知ったし、それらの特別な力をも知ったのである。祭壇の設置場所、特にそれぞれ精霊が住むとされる、主要な四つの方向に合わせて四つの祭壇を配置するやり方を学んだし、またいかにそれぞれには特別な色 東は緑、北は灰色、西は黒、そして南は白 が属しているかを学んだのだ。更にまた、この宗教の本質は雨を確保することであることを理解するようになったが、人々が祈祷や歌によって、また生け贄や断食で懐柔しながら神々に雨乞いをするというのも、雨が人間の生活に唯一必要なものだからなのである。

ホセはペヨーテという名で知られている、食べると驚くべき効能を発揮する、あの乾燥して縮こまった小さなサポテンの根っこに特に興味を持つようになった。実際、恍惚として異常な気分の高揚、歓喜は味わうし、また疲れもまったく感じなくなるほどで、確かにこれは神そのもの、ではないにしろ、神々の強力な代理といってもよいくらいだった。

「一種のトウモロコシと言ってよかろうな」とネストールはこのペヨーテについて敢えて語ったことがある。「ちょうど鹿がトウモロコシであるのと同じようにな」しかし、それは神々の送ってくれる食べ物というほどの意味に解すべきであつたらう。というのもホセはその植物が遙か東の地方に生育するサポテンの根であることをよく知っていたからだ。

「ワシが若いころは」老人は続けた。「今のウィチョール族のようにペヨーテの根っこを探るため遙か東の方へ旅だったものだ。だがもうわしは、年をとったし、わしに代わって行くものもおらんから、連中から買わなきゃならん」

そこでそのとき、ホセは自分こそ次のウィチョールの一行に加わりこの不思議な植物を求めて東の地方に赴くことを誓ったのである。彼は見知らぬ国々に旅したいという若者らしい情熱を感じるくらい、まだ若かったから。これまでたびたび村を通り抜けるペヨーテを求める一行を見たことがあつたし、村人の何人かは彼らと知り合いになってその派手な衣装と長い旅行を羨んでいたからでもある。いまや、彼らに同行して、あのペヨーテを持ち帰るのは彼自身なのだ！

「神のお加護がありますように！」ネストール老人は熱心に祈った。「俺が若かったらおまえ

と一緒に行くんだがなあ。でもおまえのために断食して祈っているよ。ペヨーテを持って帰って来れば、祭司長に要求される条件の一つを達成したことになるし、わしの跡を継ぐことになるわけだから、心置きなくご先祖さまのところへ旅立つことができる。今はもう十月だから、ウィチョールの何人かが出かけるころだ。若い頃にアスケルタンを出てウィチョール族に加わった友人のベントー・トーレスのことをわしがたびたびいうのを聞いたことがある。彼は今じゃ、部族の中でも最も重きを置かれる人物の一人になっておる。奴のところへ行ったら、助けてくれるじゃろう。それでよし！」

十月の明るく暖かい日、ホセはウィチョールの国に向かった。ホセファがバッグに脂肪を詰め、ブレ（原注）には水を入れてくれた。タバコ、マッチ、山刀マチユテ、それに毛布が残りの持ち物だった。彼は妻に手を振って別れたあと、西の丘陵の方に向かった。道は段々と高くなり、岩の斜面を攀じ登るかと思えば、チョロチョロと水が滴る峡谷を登って行き、また最近の雨で潤い、まだ少し青さの残る牧草がよく稔っている丘の裾野を通った。大きな峡谷の谷底では、細い水の流れがますます細くなってきて、やがて上方の切り立った丘の斜面の向こうに消えた。這い上がるほどにはっきりと気温が下がるのが体に感じられたし、松の木が一本、ついで多数群生している場所を通り過ぎた。一日目の夜は山林の外れで松を赤々と燃やしてその側で一晩を過ごす合間、狼の鳴き声やジャガーやピューマの唸り声に耳を澄ました。

翌朝早く、再びたびたび出発して松林の中を更に西へと向かうと、やがてウィチョールの畑、家々が見えてきた。家屋はアドビーのものがまったくない点を除けば、彼の部族のものと非常によく似ていた。幾つかの村落が形成されているが、どの村も彼が見慣れている戸外に置かれた祭壇に代わって、神社として役立っている大きな建物があった。住民はみな同じ顔をしているように見えたが、衣服はまちまちだった。スカーフ、バンド、明るい色の図柄に織り込まれたポーチ、羽根を付けた幅広の帽子などを身につけている人々、だけど脚は膝の高さまで剥きだしになっている。メキシコの労働者が身につける、伝統的な綿のズボンをはいたこの旅行者を彼らは横目で見ていた。一人、二人がウィチョール語で話しかけてきた。それはそれまで聞いたこともない多くの音からなる、奇妙な言語だったので、文明人なら、そんな言葉をオウム返してきなくて当然と、彼は妙な自信を持った。彼はスペイン語で返事したが、近くの工場で働いたことがあって、少しばかりスペイン語の単語を憶えている中年の男性がたまたま通りかかるまで誰にも理解されなかった。ホセはこの人から、この村落から数マイル向こうの小さな牧場でベントー・トーレスが暮らしていることを聞いた。ほぼ日が暮れようとする頃、そこに着いたものの、メキシコのどこでもそうであるように、家の周囲を徘徊しては歯を剥き出して唸ってくる数匹の犬を蹴散らしたあと、彼は大きな声で案内を請うた。中年の男が中から出てきた。「カフヒョーヴァン アルマノー！」とホセは挨拶をした。男は驚きのあまり、ちょっとした間物もいえなかったが、笑いながら返答した。

「カフヒョーヴァン アビ！ テペカーノ語の挨拶を聞いたのは随分久しぶりだなあ！」とスペイン語で言葉を続けた。「もうほとんど忘れかけていたよ。まあ、入れ、入れ。ここはおまえの家同然だ。フリア、わしの兄弟ワキョーリに食べ物と飲み物を持って来るんだ！」ワキョーリというのは、ウィチョール語でテペカーノ族の人間を指す言葉である。

「私はホセ・アグワイラーです。フランシスコの息子で、ネストールの孫です」

「おゝ、そうだ。フランシスコとわしは子供の頃はいつも一緒だった。ネストールにいたずらをよくしたものだ。彼もあの頃はまだ若かったなあー！ 随分昔のことだ！でも、今のお前より若かったが、わたしにはやがてどんな世の中になるかが読めたんだ。メキシコ人がわたらの土地に侵入して、神父が来れば教会が建って、わたらの共有のものだったその土地を手放して、それぞれが僅かな土地の所有者になるなんて！まるでマチェテか帽子なんぞの所有者みたいに、ご自分の土地が人間の所有物になるのを神様方がお望みになるもんか！空気や川の水もタダではなくなって生まれたばかりの赤ん坊にも空気や水の料金を払わせるようなもんだよ。あゝ、ぞっとする！ それからだよ、連中が強い酒を持ち込んできたのは。それからお前が履いているような長いズボンをお前が履くように強いたり、わたらの使う言葉をやめ、代わりにスペイン語を話せとか、古い宗教を捨てると強制してきたのはな。わたしにはそうなることが分かったから、こう言ったんだ、『わしは沢山だ！このベニトー・トーレスは御免だよ』とな。それでわたしはおまえがしたように、毛布を抱えてウィチョール族と暮らすためにここに来て、こうして長い間、神様方の仰せのままにして幸福な人生を送っている。おまえも同じことを考えたとすれば賢明なことだ。よく来てくれたな！」こう言って彼は若者の体を両手を廻して歓迎の意を示すのだった。

ホセは単純に喜んでいいのかどうか、面食らった。

「えゝ、小父さん、たしかにそれは本当です。アスケルタンにはもう古いものはほとんど残っていません。ネストールや他の年寄りが昔の宗教を守っているだけです。でも僕も新しい世代に属する人間ですからね。この服だっていつも着ているものだし、話す言葉もスペイン語、またカトリックの教えを信じています。あなたが新しい秩序に順応することができないように、僕だっいまさら古い秩序に鞍替えするわけにはいかないんです。それに新しい方向に流れるのは世の常です。ほら、ここだってもうそうになっていますよ」

ベニトーも悲しげに頷いた。「その通りだ。所詮わたしは負け犬だ。ここでも古い物はなくなりつつある。わしが時の流れに抗ったのは、ここの人たちのためではなかった。ここにやって来たのはわし自身のためじゃった。百年かそこらで、ウィチョールもテペカーノもコラもなくなり、インディアンの血を引くペオンだけになるじゃろう。でも、それならおまえがここに来たのは何のためかな？」

ホセがそのわけを説明すると、悲しげな顔が再び明るくなった。

「それはいい。ここに来た初めのうちは、わしも何度かその採取に出かけたことがあった。でもそれは若い者のやる仕事だからな。ところであれに加わるには、断食とか、苦行とか厳しい条件を乗り越えなくちゃならんが、それは知っとるかの？」

ホセは覚悟はできている旨を伝えた。

「よろしい、それなら結構。近い内に連中は準備期間の断食に入る。隊長に話してお前がそれに加わるようにしてやろう」

このような次第でベニトーの有効な仲介を通してホセはペヨーテ<sup>ペヨーテロス</sup>刈りの仲間として認められ、任務に参加する準備をしたわけである。彼は採取団の衣装と持ち物を身に着け、弓と矢、それにタバコを入れる小さな瓢箪の袋を幾つか携帯した。出発前夜、身を清め、祈りをあげたのは、長い旅から帰ってくるまで、二度と沐浴はできそうもないからだ。この一行にはこの長旅の間、唯一火を熾すことのできる人間である隊長の他、九人がいた。ロバを数頭連れていくのは、旅の間に食べるトルティーヤを運び、また帰りにはペヨーテを持ち帰るためである。それでも道中の多く、食を絶たねばならないことが予想されたし、一行の何人かは、旅に出ている全四十三日間、ペヨーテ以外はほとんど何も口にしないものなのである。

妻や家族の人々に愛情の籠った別れの言葉を交わすと、小さな旅団は出発した。アスケルタンを経由しないで彼らはまっすぐ東に向かい、木々の繁茂する山の斜面を下り、乾いて熱く、また砂っぽい、なだらかな平原に出た。毎日、毎夜単調な繰り返しの連続だった。汚れた体と空きっ腹を抱えてはいるが、しかし前方に確固とした目的 村を守り、雨をもたらしてくれる小さなサボテンを手に入れること を心に秘めて、たいていは縦に一列に並んで彼らは歩いた。熟知している小径を辿り、夜はまた決まった場所で野営をするので、郷里の人々にも毎晩一行がどこに泊まっているかが手に取るように分かった。この小道は、何世紀もの間通ってきたものであり、通常の道や村落から離れて極めて見つかりにくいルートであったので、旅人たちが居住地区にいるメキシコ人の目に触れる機会はほとんどないといつてよかった。

しかし旅がほぼ半ばに達した頃だったが、大都市であるサカテカス<sup>25)</sup>から程遠くない、ある地点で、避けては通れない道路にさしかかった。その道は平行に並べた、沢山の短い木材から出来ていて、その上に長い蛇のように曲がりくねった二本の鉄のレールが括りつけてあった。ホセは、他の連中よりは「進んでいた」が、このようなものはいずれも見たこともなかった。しかし以前ここに旅したことのあるものが、身振り手振りで、ちょうど馬が荷車を曳いていくような調子で、巨大な怪物が後ろに人間を満載した家を何軒も曳きずって行きながら猛スピードでこの道を駆けていった、と説明するのを聞いた。その説明から感受性の強い少年時代に、ある巡回の物売りから鉄道のことを聞いた憶えのあるホセには、それが何であるか察しがついたのである。

絶えず東へ、東へと彼らは急いでまる二週間も過ぎた頃に、隊長が目的地まではあと五日し

かかからないこと、またいまからは、あらゆる決まりを厳重に守らなければならない、と一行に告げた。ずっと一列縦隊で歩かなければならぬし、これから先ペヨーテしか食べてはいけぬ、のであった。数日後ホセは初めて小さなペヨーテの根を目にし始めたし、一行が足を早めるにつれて益々この植物が繁茂するようになってもなお、隊長は気づかない振りをしていた。九日目、およそ三百マイルは踏破したと思われる頃にやっと隊長が、止まれ、と号令を掛けた。飢えと疲れで倍加した興奮のため、彼は身を震わしながら叫んだ。

「鹿のように見えるペヨーテは、あそこにある！」

それとともに皆は一斉に矢を継がえ、そのペヨーテめがけてひょろろ放った、むろん、当たらないように気をつけながら。それから口バの荷からいろんな儀式用の品々 矢、チマーレ、杖バストーン、それとテペカーノでは使わない他の物 が引き出されて、神々やペヨーテへの貢ぎ物として並べられたのである。それから三日間は全員が小さなそのサボテンの根を刈り集め、数頭の口バでは運びきれなくなったので、降ろして皆の首に紐を巻き背囊とした<sup>26)</sup>。到着して五日目、彼らは故郷に向かって長い帰途に就いたのである。

このときまでにトルティーヤの貯えが完全に尽きてしまい、特に普通食に慣れてペヨーテにはそれほど馴染みのないホセにとって、これは大きな苦しみとなった。他の連中にはさしたる苦痛でもないように見えた。細い脚とやつれた顔はそれ相当の疲労を示していたのだが、数多くのペヨーテの根を食べ、ある種の酩酊が生み出す作用とも思える活力と弾んだ足どりでは進んだからである。ときどきは土地の住民が食べ物を与えてくれたが、しかしこれは極めて稀で、帰りの旅の初めの二週間はほとんど意識も朦朧たる状態で歩き通し、ペヨーテの摂取による神経の興奮によって持ちこたえたのであった。

それでもとうとうその十四日も過ぎて一行は、故郷から五日程要するある地点までたどり着いたが、隊長に拠れば、そこで村の有志がトルティーヤを十分用意して待っている、とのことであった。実際その言葉通りであった！ 焦げ付くような日向に五日間晒されてカラカラに乾いたトウモロコシ菓子の味は何と素晴らしかったか！ 新たな活力を得て彼らは、あの松林のはずれまで歩み続けたあと、そこで数日間は鹿狩りに精を出して帰還のあかつきは歓迎の宴に必要となる、肉を手に入れたのである。

数日後、やせて憔悴しきった男たち 彼らの容姿は長旅の窮乏から漸く回復の兆しが見えたが それでも立派に義務を完遂したことを高潔の証に昂然と頭をもたげながら、またペヨーテと鹿肉の大袋を口バに満載しているばかりか、首にも紐を吊してそのペヨーテを持ち帰って来たこの一団は、村の目抜き通りを意気揚々と行進するのであった。

「身体は洗ってはならない」という禁忌タブーは祝宴のあとでないと解けないので、姿かたちこそ薄汚く、また脚も引きずってはいたが、村社に入って大事な根を奉納したとき、彼らは残った人々のヒーローであったのだ。それから彼らは再び一月のペヨーテ大祭のために大量の肉を確

保するという名目で鹿狩りに出た。

しかしホセの心は、帰心矢の如しであった。自分は義務は果たしたのであるし、自分にはほとんど興味のない祭りの準備のための一月、二月を免除してもらい帰郷を許されてもよい、と思ったのである。ベニトーがホセのために一役買って出て、出発が許されるように説いた。ペヨーテ集めに関わる決まりを破ることは、神々を怒らせて被害を招く、と懼れる呪い師連の多くは異を唱えた。しかし最終的には危害というのは、仮にあったとしても罪人の上に下されるものでアスケルタンの人々にも、ましてやウィチヨールの民に何の被害も及ぶものではない、という議論が勝ちを占めて、ホセはベニトーの妻、フーリアが作ってくれた分厚いトルティーヤを背に、道中の安全を祈ってもらい帰路に就いた。

松林の端を出てしばらくぶりに眼下に口を開いている割れ目を見たとき、その大峡谷は何と綺麗に見えたことか！ 中央に白く小さな教会を置いて周囲に小じんまりと群がった日干し煉瓦や茅葺きの粗末な家並を見つけたとき、何と嬉しかったことだろう！ わが家に近づいたとき、愛する妻が走り出て彼に抱きついた。帰郷とは何と素晴らしいことか、また、妻の作ってくれるトルティーヤは、ウィチヨールの女たちが作ったものより遙かに美味しかったのだ。

しかし長い留守のあと、家に帰ってきてまだほんの数分しかならないのに、ホセファがすぐに切り出した。「ネストールお爺さんが危篤で一時間ごとにあなたのことを聞いていらっしやるわ。あなたのお帰りを指折り数えて待ってらして、もう帰るころだとか、あなたを一目見るまでは死ねない、と仰有っているのよ」

ホセは息せききって老人の家へと続く、曲がりくねった道を走り、近くに来たとき、老いた祈祷師たちの誰かが、癒しの歌の一つを唱っているときの痛ましい泣き声が聞こえてきた。床の上の毛布に老人は寝て、周囲には儀式用の矢とか、その他の神聖な道具が置かれてあった。ホセが中に入ると、微笑を浮かべ、祈祷師に歌を止めるように言った。

「もうよい、無駄なことだ」とボツリと言った。「わしの最後がやってきた。遅かれ早かれ誰にもやってくるものだ。昨晚も夢に見たぞ、おまえに会うまでは、絶対に死なれんのだ。わしのためにペヨーテを持ってきてくれたんだな。よし、もうわしには役にたたん。いや待て！一杯だけ飲ませてくれんか。頭がハッキリするかもしれんからな。でも残りはおまえのために取って置くんた。ペヨーテの土地ザ・チーフ・シンガーに行つて祭司長の資格を手にしたのは、この部族ではおまえの他にはおらん。それにおまえは、歌も祈祷も、儀式の細則もすべて憶えた。それでわしが秘蔵しておる貴重品の弓やチマレやシドカムも全部おまえに残してやる。必要な際には役にたつだろうし、おまえが大事にしている限り、神様方はプエプロ族に何の危害をもたらされることもない。フランシスコ！バルドメロ！ホセはわしの跡を継いで祭司長になってはいかんかな？」

「いいですとも！」フランシスコは言った。「ホセ、おまえは年は若いが、経験や知識は豊富だ。お爺さんの言うとおりにしたらどうだ？」

ホセは渋々同意した。

数日後教会の裏の小さな墓地に向かう曲がりくねった道をゆっくりと長い行列が続き、ネストール老人の遺骸が収まった黒塗りの質素な木箱を屈強な男たちが運んだ。昔の葬式の習慣はすっかり忘れ去られていたし、仮にそうでなくても、フランシスコがわざわざ聖地以外の場所に父親を埋葬するなんてあり得なかった。そうは言ってもともかく、ホセは老人が最も大切にしていた神聖な品物の中から二、三を選んで箱の中にしまい込んだのだが。その後、彼は、はるばる神父さまのお宅まで出かけて、故人の冥福を祈るミサをあげてくれるように頼んだ上で、残りのものを安置するために丘の上にある主祭壇に向かったのである。

一年かそこら、ホセは祭司長ザ・チーフ・シンガーの仕事に忠実にこなしていたが、いろんな規律や断食やらに彼は飽きてきた。それから怠け始めて、ついにはまったく放棄してしまった。保守派の何人かが忠告したが、彼はこう応えるのだった。「儀式を行わなくとも、雨が降ってトウモロコシは採れるし、やったところで病気や飢饉が少なくなるわけでもない」と。確かに彼の言葉は事実に支持されていたのである。それから程なく、クリンゴ米国の学者が言語と習慣を学びにこの村にやってきたときだったが、ネストールの神聖な遺品が高く売れたため、ホセは大いに喜び、いい厄介払いができたと言った。

J. オールデン・メイソン<sup>27)</sup>

## 原注

- 1) ソトール壺 a bottle of sotol. アガベ、リュウゼツラン(竜舌蘭)から造ったブランディ。ソトールとは「①メキシコ産ユリ科ダシリオン属の植物②それから造る蒸留酒(桑名一博他編『西和辞典』小学館、1997)」(訳者)
- 2) ヒカラ jicara Gourd cup. ヒョウタン製のコップ、椀。
- 3) ピノーレ pinole. Corn meal .トウモロコシの粥。
- 4) トロアチェ Toloache. Jamestown weed. 別名 jimson-weed、すなわちシロバナチョウセンアサガオのこと。jimson-weed, apple of Peru, stinkweed ともいう(訳者)。
- 5) レボゾ rebozos. Shawls ショールのこと。なお前掲『西和辞典』によれば「①(顔の下半分を覆う)ショール②マンティージャ:スペイン・メキシコなどで女性が頭と肩を覆うショール③顔の下半分を覆い隠すこと④見せかけ、まやかし」とあり、②のマンティージャ(mantilla)と同義であろう。
- 6) 半リアル half-real. Twelve cents. 12 セント。
- 7) タマレ tamales. Cooked corn meal wrapped in corn husk. トウモロコシの莢でくるんだトウモロコシ粥。
- 8) ブレ bule Gourd bottle. 瓢箪の瓶のこと。

訳注

- 1) テペカーノ族 Tepecanos 現在メキシコ高原西部ハリスコ州のアスケルトン\*という小村に居住する先住民。かつてはシエラ・マドレ南斜面でかなり広範な領土を保有する、相当有力な部族であった。この地において彼らを「発見」した初期のスペイン人の征服者たちは、チチメカ族とみなした。この部族のその後の歴史は、メキシコ人の残した散漫な記録の精査と吟味によってはやがて明らかになるであろう。おそらくはこの白人侵略者に対して果敢な戦いを挑んだ末に敗北したと思われる。メキシコが国家として次第に体制を整え、ヨーロッパ人との混血が進んでいく間、部族の保守派は絶えず後退を余儀なくされ、結局ハリスコ州北部のアスケルトンという周囲数マイル平方の土地に居着いたものと思われる。人口は1920年当時で数百人にまで縮小し、しかもこれらの大半が混血である。身体的には、西部メキシコの先住民諸族に非常に類似しており、言語的にもほぼ同様のことが言えようが、しかし異なる面の方がはるかに大きい。テペカーノ語は、北西メキシコ及びアリゾナのテペユアーネ、パバゴーノ、ピマに近似して、ユート・アステカ語族に属するウィチョ・ル\*やコラ\*とはかなり異なっている。(\*印は後出事項)
- 2) 祭司長 the chief singer 以下本文に頻出する用語である。79-80頁にあるようにスペイン語 *Cantador Mayor* を直訳したものなので、更にこれを日本語に直せば「部族一の歌い手」となる。しかしながら、ここでいう歌とは、主人公の祖父を初めとする呪い師や祈祷師などの霊能者が部族の神話・伝説に節をつけて暗誦するものであり、内容的には古代社会の祭司(シャーマン)が、病気平癒を祈願して唱ったものとほとんど変わらず、呪術的・祭儀的な色彩が濃厚である。したがって後世の芸能的・娯楽的な意味合いは極めて薄いのでここでは敢えて「祭司長」という訳語を選択したが、文脈によっては原語の意味するところを活かしてそのまま「部族一の歌い手」としたところもある。なお注7)も参照のこと。
- 3) ドン・パンチョ Don Pancho スペイン語 Don は、殿、様、師、卿などの意で元来は貴族に対する敬称であったが、現在では社会的に高い地位にある人のほか、親しみを込めた敬称としても用いられる。Pancho は Francisco の愛称(『西和中辞典』小学館)。
- 4) アスケルトン Azqueltán テペカーノ族の居住区。本訳注1)参照。
- 5) ペオン peon 一般には「日雇い労働者、人夫、工夫、下働き」だが、ラテンアメリカでは「①農園労働者、作男②(メキシコ)見習い、弟子」(『西和中辞典』小学館)。
- 6) ウィチョール Huichol 「メキシコ西部のハリスコ州とナヤリ州の山岳地帯を中心に、約7000人が居住している(1959年)。トウモロコシ、豆、カボチャなどを中心とする焼畑農耕を営み、牛、羊などを飼育している。シカ、イグワナ(トカゲの一種)などの狩猟や川魚漁もよく行われる。外来の文化を拒む力はメキシコ以外の少数民族より強く、伝統的文化や信仰をよく維持している。太陽神、火の神、地母神、水の女神、蛇神、トウモロコシ神など100に及ぶ土着の神々が現在も信仰されている。独特の祭祀用の家をもち、その中には神々と交感するための矢、円盤、ヒョウタン容器など豊富な儀礼用具が安置されている。ウィチョールは多様な儀式を行うが、中でもペヨーテ(Peyote 幻覚作用のあるサボテンの一種)を求めて40日間にわたって行う巡礼は重要な通過儀礼である。これを終えると男たちは呪力を持つようになると考えられている。18世紀からカトリック教も受容されたが、カトリックの聖人は土着の神々の中に加えられたり、そのいくつかは土着の神々と同一視されるようになったに過ぎない。文献 Alfonso Fabila, Los Huicholes, Mexico D. F.: Instituto Nacional Indigenista, 1959.」(稲村哲也「ウィチョール」『文化人類学事典』弘文堂、昭和62年)
- 7) コラ Cora 「メキシコのハリスコ州とナヤリ州の西シエラマドレ山脈中の自然環境の厳しい地

域に居住する。人口は約 3000 人。ユト・アステカ語族に属する。以前はウアリカ (Uarica) ないしはヘコラ (Xecora) とも呼ばれた。生業は、トウモロコシ、豆類、カボチャ、トウガラシなどの栽培を中心とする農業。家屋は平屋。台所、納屋、客間は独立する場合が多い。比較的小規模な村落を形成する。ファン・フローレス・デ・ラ・トレ (Juan Flores de la Torre) によるその地方の攻略 (1722 年) まで、その隔絶した地理的条件のため独立を維持。長老を中軸とする独自の伝統的政治体系を備え、社会生活全般に大きな影響力を持つ。村人の選出を受けて州知事から任命される長と伝統宗教の祭祀の代表として神話などを暗誦するカンタドール (cantador) が同様に村落に対して権威を発揮。村落の共有地が存在し、毎年分配される。分配を受けるには数々の要件を満たす必要があり、村落での居住が全てではない。カトリック聖人への信仰は伝統宗教との習合に過ぎず、洞窟には多くの石像が見られる。このシンクレティズムが濃厚に反映するのが復活祭である。風変わりな受難劇が上演される一方で、祭典の指揮をとるのは、村人の演じる“ユダヤ人”(juideo) であり、彼らは身体を白、黒、赤などに彩色し仮面を付ける。幻覚性のサポテン・ペヨーテを食べたり身体に擦り込んだりして祭典に熱狂し、“亀の踊り”と称する性的な舞踊を披露する。文献 Hinton, Menzon, et al., *Coras, Huicholes y Tepehuanes*, Mexico: INI, 1972, G. Gonzales, *Los Coras*, Mexico: Sep/Ini, 1972) (加藤隆浩「コラ」『文化人類学事典』)

- 8) コマル the comal. 「《ラ米》(中米)(メキシコ)(tortilla などを焼く) 素焼きの薄皿」(『西和中辞典』)
- 9) チリ・ソース Chilisa sauce. 唐ガラシとその他の香料入りのトマトソース (松田徳一郎監修『リーダーズ英和辞典』研究社、1986)
- 10) チャン chan. 意味不明の言葉であるが、文脈から察するところ、この部族で言い伝えられる巨大な怪獣の類らしい。注 21)、22) に付した次頁図 1 の上に描かれている、蛇らしき姿がそれか?
- 11) ウチワサポテン the nopal. 「《植》オープンチア、ウチワザポテン: 熱帯アメリカ原産 果実は higo chumbo, tuna」(『西和中辞典』)
- 12) クジャクサポテン the pitahaya. 「《ラテン米》【植】セレウス、クジャクサポテン: 実は食用」(『西和中辞典』)
- 13) 蛇は大地母神を象徴するものとして、洋の東西を問わず古代、多くの民族によって信仰の対象にされた。日本では、縄文時代に蛇巫女と言われた女性が蛇を飼育していたことが土偶より想定されるし、中国地方その他では「家の守護神として土瓶の中にかくさんの小蛇を入れて飼っていた」(吉野裕子『蛇 日本の蛇信仰』法政大学出版局、1995、PP.165 - 212)。また古代ギリシャのバルテノンは「蛇神殿であり、蛇巫女がいた」(安田喜憲『蛇と十字架: 東西の風土と宗教』人文書院、1995、P.40 - 41) し、「クレタ島のクノッスス宮殿で蛇を飼育した蛇巫女像が発掘されている」(R.W. Hutchinson, *Prehistoric Crete*, Penguin Books, Baltimore, Maryland, 1962, P.208) という。
- 14) 革命時代 during a revolution. 原著の出版された 1922 年以前のメキシコにおいて「革命」とは、1910~20 年の「メキシコ革命」を指しているものと思われる。「原住民インディオはメキシコ湾岸からオワハカ盆地にかけてオルメカ文化、ユカタン半島にマヤ文化、中央高原にトルテカ文化、アステカ文化を築き上げたが、1521 年にコルテスのスペイン軍に、以後 1810~21 年の独立戦争までスペインの支配下に置かれた。1821 年のコルドバ条約で独立を達成し、イトゥルビデの帝政を経て 24 年に連邦共和国となった。1845 年にテキサス州併合問題を端緒とした対米戦争に敗れ、48 年のグワダルーベ・イダルゴ条約で国土の約半分を失った。ちなみに、現在のア

メリカのカルフォルニア州、アリゾナ州、ニュー・メキシコ州はこのときにメキシコがうしなつた領土であり、この事実はメキシコ人の根強い反米感情の大きな原因となっている。政治的・社会的改革の試みは保守派と自由派との間の内線を招き、やがて債務の支払い、損害賠償の問題をめぐってイギリス、アメリカ、フランスの干渉を誘発し、1864年にフランスが皇帝に仕立てたオーストラリアのマクシミリアン大公が67年にファレス率いるメキシコ軍によって処刑され、戦後の混乱を巧みに処理したファレスも72年に急死した。1876年から1910年の革命まで35年間独裁者として君臨したディアス大統領のもとでメキシコは秩序を回復し、大地主、外国資本、教会勢力、軍部に支えられたディアス体制のもとで近代化が進められ、鉱山が開発され、鉄道が建設されメキシコ市にはパリのシャンゼリゼ通りを模したレフォルマ通りが建設されたが、そのような進歩の恩恵に浴することの少なかった農民や労働者や民族資本家の不満がやがてメキシコ革命を引き起こした。メキシコ革命の理念を具現化した1917年憲法は、土地革命、労働者の権利、カトリック教会の勢力削減、地下資源に対する国家の主権などを明記した」(丸谷吉男「メキシコ」『日本大百科全書』小学館、1995)

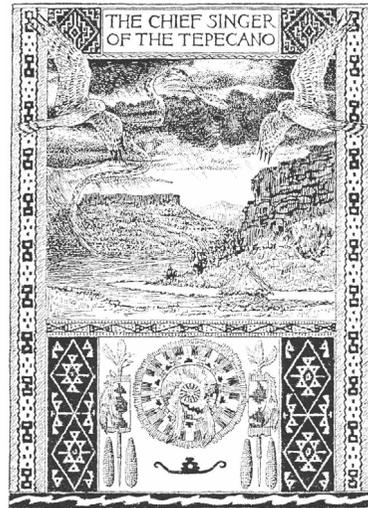


図1 テペカーノ族の祭司長

- 15) メイキングズ “makin’s”. [《米、藁》手巻きタバコ材料《紙とタバコ》] (『リーダーズ英和中辞典』)
- 16) 仲間たち compadres. 「1.(洗礼に立ち会う)代父、名(付け)親。mi~(両親からみた)子供の代父 2.友人、仲間、(特にスペイン Andalcia 地方の男性間で)相棒 3.《ラ米》(ラプラタ)威張り屋、自慢する人、見栄っ張り」(『西和中辞典』)とあるが、2の意であろう。
- 17) センタボ centavo. 単位貨幣(1ペソ)の100分の1。
- 18) ピノーレ祭り the Pinole. ピノーレとはトウモロコシ粥のことである(原注3参照)から、冬の1月、寒気を追い払う意味でトウモロコシ粥を食べる祭りのことであろう(本文73頁も参照)。
- 19) ペヨーテ peyote. 「1《植》ペヨーテ、ウバタマ:メキシコ・米国西南部産の麻酔性物質を含むサボテン。2ウバタマから取った幻覚剤。[ナワトル起源]」(『西和中辞典』)。なお、訳注6)7)も参照されたい。
- 20) 拝領者たち the communicants. 「1《プロ》陪餐者、《カト》聖体拝領者、《ギ正教》領聖者。2伝達者、通知者」(『西和中辞典』)。この祭りが部族の伝統的な祭りであるとすれば、カトリックの「聖体拝領者」という用語を用いるのは少々おかしいが、おそらく、この物語の時代(19世紀末)には既にカトリックと伝統的宗教の混濁が相当進んでいたと考えられる。従ってもともと冬季の寒気払いとトウモロコシの精霊の復活を祈った祝祭が、ミサにおける、神の子イエスの肉体としての聖餅を食べる儀式と習合した結果、このような祝祭へと変化を遂げていたのであろう。
- 21) タペステ tapexste. タペストリー(tepestry=つづれ織り)のことか?前頁上図1の上部参照。
- 22) チマレ chimal 「《ラ米》(メキシコ)もじゃもじゃの髪」(『西和中辞典』)。図1の下部参照。両側の大小様々な菱形がチマレ。

## 北米インディアンの生活(5)

- 23) 錫杖 bastoncitos . バストン baston は「官職・権威を象徴する杖、官杖：権威、権力」また語尾の - cito は縮小語(『西和中辞典』)。
- 24) シドカム the cidukam . 本文の説明の通り、偶像(idol)の意のテペカーノ語であろう。
- 25) サカテカス Zacatecas . メキシコ中部の州、州都。
- 26) 首に紐を巻き背囊とした wore strings around their necks . 荷物運搬用の大型家畜のいない、マヤ族の男女も顔に「負い革」(タンプリン tampline)をかけ、重い荷物を背負って運ぶ(メアリ・ミラーノカール・タウベ編+増田義郎監修+武井摩利訳『マヤ・アステカ神話宗教事典』東洋書林、2000年、P.14参照)習慣がある。
- 27) J. オールデン・メイソン J. Alden Mason 生没年不詳。アメリカの人類学者で原著の分担執筆者の一人。テペカーノ族に関する以下の論文がある。
- ①“The Tepehuan Indians of Azqueltán” (Proceedings 18 th International Congress of Americanists, London, 1921) ②“The Fiesta of the Pinole at Azqueltán” (*The Museum Journal*, III, University Museum, Philadelphia, 1912) ③“Tepecano, A Pima Language of Western Mexico”(Annals of the New York Academy of Science, vol. X X V, New York, 1917) ④“Tepecano Prayers”(International Journal of American Linguists, vol. I, II, 1918 ) ⑤“Four Mexican Spanish Folk Tales from Azqueltán, Jalisco”(Journal of American Folklore, vol. X X V, 1928) ⑥“Folk Tales of the Tepecanos”(Journal of American Folklore, vol. X X VII)

付記：本稿はエルシー・クルーズ・パーソンズ編著/神徳昭甫訳「北米インディアンの生活(4) 23部族の伝承と習慣」『富山大学人文学部紀要』第33号(2000年、8月)の続編である。なお、文献は最終稿にまとめて掲載する予定。